

ノートルダム清心女子大学
地域連携・SDGs推進センター実績報告書

[2024（令和6）年度]

ノートルダム清心女子大学
地域連携・SDGs推進センター

目 次

センター長ご挨拶	1
I. センターの概要と新しい取り組み	2
1. 地域連携・SDGs 推進センターの概要	2
2. 新しい連携協定について	4
II. 地域連携活動の一覧と報告	5
1. 地域連携活動実績一覧	5
(1) 連携協定一覧	5
(2) 連携協定に基づく活動実績一覧（締結順）	5
2. 地域連携活動報告（一部）	12
(1) 各連携協定に基づく活動（締結順）	12
【NPO 法人こくさいこどもフォーラム岡山との包括的連携協定に基づく活動】	12
2024 年度「国際塾」の報告	12
【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：学生イノベーションチャレンジ】	14
[岡山観光ガールズ]—外国人旅行者に「観光地・宿泊地」としての岡山の魅力を発信—	14
[ツボジョーワールド探検隊]—「文学創造都市おかやま」としての坪田譲治普及活動—	16
人間生活学科経営経済学コース大東ゼミ（団体名「nopak」）「食品ロス軽減のための エコロジカルなソーシャルビジネスプロジェクト」の報告	20
犬島ソーシャルデザイン研究グループ：持続可能性、コミュニティ、自立の促進	22
【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：その他】	25
3 年間の日韓文学交流から見えてきたもの	
—両国の言葉の奥にあるものを見つめ味わい直す—	25
2024 年度 文学によるまちづくり協働事業	
よむよむふむふむプロジェクト活動報告	27
【総社市との包括的連携協定に基づく活動】	28
総社市インターンシップ参加報告	28
【一般社団法人日本自動車連盟（JAF）岡山支部との包括的連携協定に基づく活動】	29
JAF 岡山支部との連携活動（第 2 段階）	29
【赤磐市との包括的連携協定に基づく活動】	30
「赤磐市を舞台にした新イベント検討会：ワークショップ」参加報告	30
(2) その他の連携活動に関する報告	31
社会福祉士課程における地域連携活動	31
III. SDGs 推進活動の一覧と報告	34
1. SDGs 推進活動実績一覧	34

(1) 「SDGs 理解」推進に関する活動実績一覧	34
2. SDGs 推進活動報告 (一部)	37
(1) 「SDGs 理解」推進に関する活動	37
国際連合関連 UNU グローバルセミナーを終えて	37
国際連合関連: UNU グローバルセミナー体験談.....	39
2024 Japan University English Model United Nations at Notre Dame Seishin University.....	41
国連大学学長との学生懇談の報告	45
(2) SDGs の達成に関する活動	46
【清心コラボ】岡山湯郷 Belle ボランティアに参加して.....	46
【清心コラボ】「消費者ネットおかやま」との連携活動報告書	47
【清心コラボ】中国銀行との意見交換会活動を終えて	48
IV. 資料編.....	49
1. 地域連携・SDGs 推進活動に関する新聞記事・雑誌記事	49
2. 2024 年度 生涯学習センター「清心 felice」講座の記録.....	61
3. 2024 年度 産学連携センター事業の記録 (一部).....	62

センター長ご挨拶

地域連携・SDGs 推進センター長 濱西栄司

地域連携・SDGs 推進センターは、ノートルダム清心女子大学の建学の精神に基づき、地域への貢献、および「持続可能な開発目標」(SDGs)の達成を推進することを目的として2019年に設立されました(前身は2014年設立の地域連携センター)。2023年度までに岡山市、NPO 法人こくさいこどもフォーラム岡山、株式会社山陽新聞社、早島町、和気町、岡山市農業協同組合、総社市、天満屋グループ、株式会社両備システムズ、赤磐市との間で包括連携協定を締結し、さまざまな団体と連携して活動を行ってまいりました。

本センターが大切にしていることは、地域連携活動の「質」をより高めること(とくに連携を双方向的なものにすること)、そしてSDGsに代表されるサステナブルな活動の推進をグローバルに展開していくこと(岡山・瀬戸内から関西・関東、国際機関、世界へ)です。

2024年度は、新たに株式会社リョービツアーズ、一般社団法人日本自動車連盟岡山支部(JAF 岡山)との間で包括連携協定を締結させていただきました。また、学部学科・学年を超えて清心生が協力して実施する社会連携活動(清心コラボ)として、一般社団法人岡山湯郷 Belle の試合運営ボランティア・観戦活動、JAF 岡山との自転車ヘルメット着用率向上の活動、NPO 法人消費者ネットおかやまとの連携事業(SNS パトロール)、(株)天満屋との商品企画活動、中国銀行との学生意見交換会活動、株式会社TCC との高大連携事業、また総社市との連携事業(政策提言型インターンシップ、そうじゃ吉備路マラソンボランティアへの学生派遣等)、赤磐市との連携事業(新イベント企画への学生派遣等)などを実施させていただきました。各活動の詳細は、活動報告をご覧ください。

本報告書は、2024年度の本センターの活動実績を記したものです。他にも各教員・学生、各学科はさまざまなかたちで地域連携やSDGs 推進の活動をおこなっていますので、それらは大学 HP の学科ブログ等をご覧ください。本報告書の前半は「地域連携」、後半は「SDGs 推進」にあてていますが、区分はあくまでも便宜的なものです。また報告書の最後には、生涯学習センターと産学連携センターの活動記録も掲載しています。

なお、本報告書中に山陽新聞社の記事が転載されていますが、これは同社との包括連携協定にもとづいて特別に許可されているものです。同社のご配慮に心から感謝いたします。

I. センターの概要と新しい取り組み

1. 地域連携・SDGs 推進センターの概要

設立の趣旨

ノートルダム清心女子大学地域連携・SDGs 推進センターは、前身の地域連携センターを拡充し、総合的な地域貢献活動と「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals : SDGs) の達成、及び関連学術研究・人材育成に取り組むことを目的としている。

活動のポリシー

- ・地域連携ポリシー：岡山・中四国地域の諸団体（地方自治体、産業界、メディア、公益社団・財団法人、NPO 法人等）との連携を引き続き発展させるとともに、京阪神・関東圏・海外の諸団体、国際機関、国際協力 NGO 等との連携も視野に入れる。
- ・SDGs 推進ポリシー：本学の母体ナミュール・ノートルダム修道女会の長年にわたる国際連合や開発途上国での活動、SDGs 制定への尽力、及び世界中の系列大学・学校での SDGs 実践等をふまえた「SDGs 理解」と、女子大学である本学の特徴をふまえた SDGs の達成とを推進する。

組 織

名 称：ノートルダム清心女子大学 地域連携・SDGs 推進センター

(NDSU Center for Regional Collaboration and SDGs Promotion : NRS)

開 設 日：2019 年 4 月 1 日 （旧 地 域 連 携 セ ン タ ー 開 設 日：2014 年 4 月 1 日）

スタッフ（2024 年 4 月 1 日）：センター長 濱西 栄司（文学部現代社会学科教授）

主任 濱崎 絵梨（人間生活学部人間生活学科准教授）

事務職員 山本 恵理 圓山 紗永

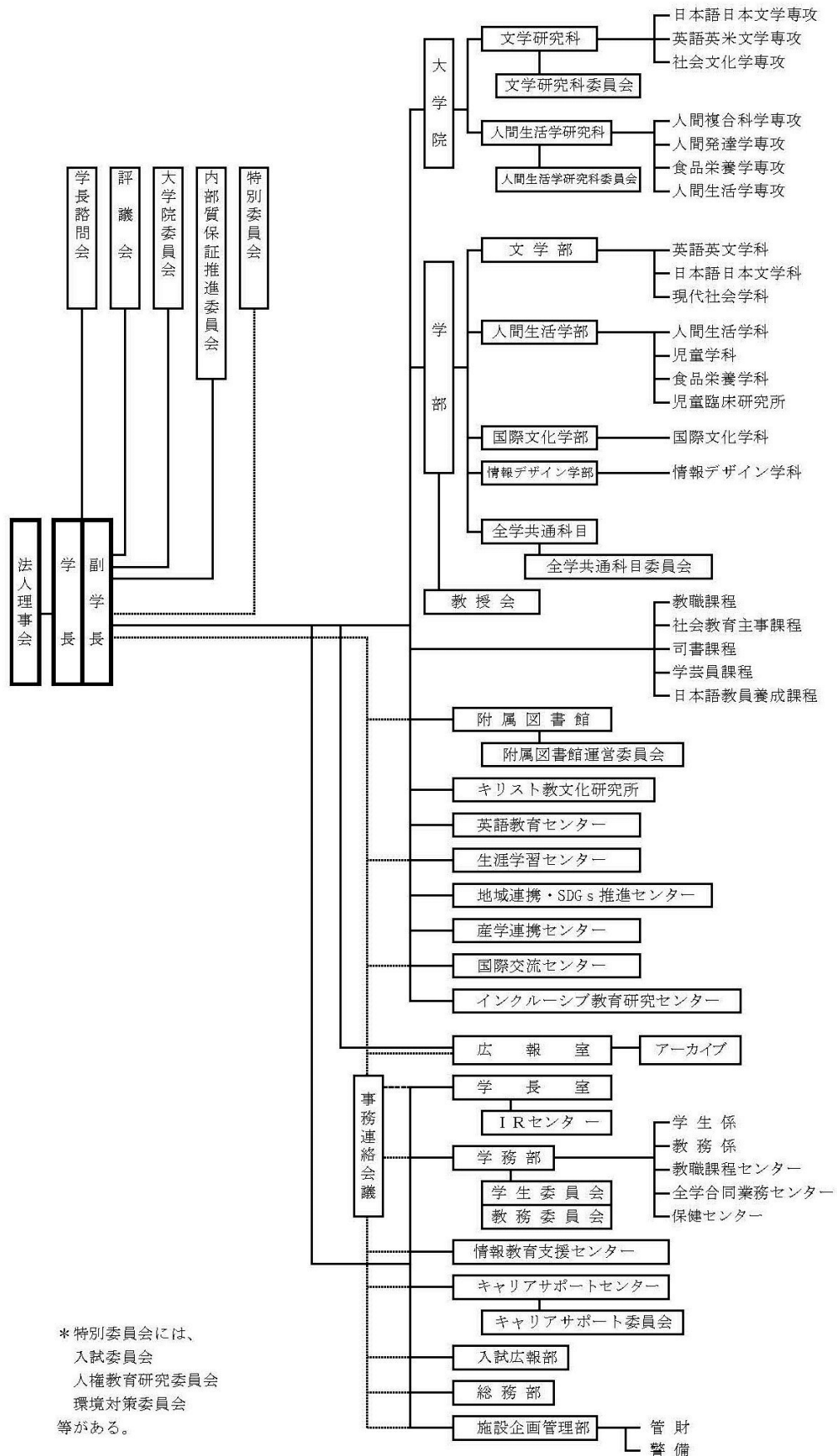
センター外観



ノートルダム清心女子大学運営組織（2024（令和6年）4月1日現在）

ノートルダム清心女子大学運営組織

（2024（令和6）年 4月 1日現在）



2. 新しい連携協定について

2024年度に、本学は新たに株式会社リョービツアーズ、一般社団法人日本自動車連盟（JAF）岡山支部との間で、包括連携協力に関する協定を締結いたしました。

株式会社リョービツアーズと本学の間の包括連携協定は、2024年8月1日に締結されました。本学国際交流センターが中心となって実施するイギリスのリバプール・ホープ大学との連携活動において、リョービツアーズのノウハウや資源を活用させていただき、また相互に連携・協力することで、インバウンド観光の推進など、地域課題の解決に貢献することを目的としています。



協定書を手に 谷口リョービツアーズ代表取締役 COO（右）と津田学長（左）

一般社団法人日本自動車連盟（JAF）岡山支部と本学の間の包括連携協定は、2024年11月21日に締結されました。本センター・本学学生とJAF岡山は、2023年度から、自転車乗車時のヘルメット着用促進を目的とした交通安全プロジェクト等に取り組んでおり、今回の協定はさらなる連携強化を目的としています。締結式後には、本学学生とJAF岡山支部職員のプロジェクトメンバーによる活動報告が行われました。



協定書を手に 中川 JAF 岡山支部長（右）と津田学長（左）

Ⅱ. 地域連携活動の一覧と報告

1. 地域連携活動実績一覧

(1) 連携協定一覧

- ・2014（平成26）年6月1日
岡山市教育委員会との間で連携協力に関する協定を締結
- ・2014（平成26）年8月8日
早島町との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2014（平成26）年8月25日
株式会社山陽新聞社と包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2014（平成26）年8月25日
NPO法人こくさいこどもフォーラム岡山との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2016（平成28）年5月12日
和気町との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2018（平成30）年5月23日
岡山市農業協同組合（JA岡山）との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2018（平成30）年11月2日
岡山市との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2023（令和5）年2月15日
総社市との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2024（令和6）年1月31日
天満屋グループとの間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2024（令和6）年1月31日
株式会社両備システムズとの間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2024（令和6）年3月27日
赤磐市との間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2024（令和6）年8月1日
株式会社リョービツアーズとの間で包括的連携協力に関する協定を締結
- ・2024（令和6）年11月21日
一般社団法人日本自動車連盟（JAF）岡山支部との間で包括的連携協力に関する協定を締結

(2) 連携協定に基づく活動実績一覧（締結順）

1) 岡山市教育委員会との活動実績（各学校との連携を含む）

年 月 日	内 容
2024（令和6）年4月1日	令和6年度岡山市スクールカウンセラーとして人間生活学部児童学科 東俊一准教授が委嘱。委嘱期間：2024年4月1日～2025年3月31日
2024（令和6）年5月2日	令和6年度「特別支援教育の視点を生かした授業づくり実践研究」研修会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。

2024（令和6）年5月24日	令和6年度専門化支援チーム会議指導助言者として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。
2024（令和6）年6月11日	令和6年度「特別支援教育の視点を生かした授業づくり実践研究」研修会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。
2024（令和6）年9月4日	令和6年度「特別支援教育の視点を生かした授業づくり実践研究」研修会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。
2024（令和6）年9月11日	令和6年度「特別支援教育の視点を生かした授業づくり実践研究」研修会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。
2024（令和6）年9月25日	岡山市立平井小学校校内研修講師として人間生活学部児童学科 土居裕士准教授を派遣。
2024（令和6）年11月19日	令和6年度「子どもが輝く学びづくりプロジェクト」授業研修会指導講師として人間生活学部児童学科 杉能道明准教授を派遣。
2024（令和6）年12月4日	令和6年度岡山県・岡山市教員等育成協議会委員として文学部日本語日本文学科 伊木洋教授が委嘱。委嘱期間：2024年12月4日～2025年3月31日
2024（令和6）年12月23日	令和6年度岡山県・岡山市教員等育成協議会委員として文学部日本語日本文学科 伊木洋教授を派遣。
2025（令和7）年1月1日	岡山市文化財保護審議会委員として文学部現代社会学科久野洋准教授が委嘱。委嘱期間：2025年1月1日～2026年12月31日
2025（令和7）年1月20日	令和6年度「特別支援教育の視点を生かした授業づくり実践研究」研修会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。
2025（令和7）年1月29日	令和6年度「子どもが輝く学びづくりプロジェクト」授業研修会指導助言者として人間生活学部児童学科 赤木雅宣教授を派遣。
2025（令和7）年3月	岡山市教育研究研修センター研修講座講師として人間生活学部児童学科 杉能道明准教授が委嘱。委嘱期間：2025年3月～2026年3月
2025（令和7）年3月	岡山市教育研究研修センター研修講座講師として人間生活学部児童学科 赤木雅宣教授が委嘱。委嘱期間：2025年3月～2026年3月

2）早島町との活動実績

年 月 日	内 容
2024（令和6）年9月8日	早島町立図書館講座講師として文学部日本語日本文学科 東城敏毅教授を派遣。演題：「『万葉集』伝説歌の生成―「菟原処女（うなひをとめ）伝説」と「浦島伝説」―」（全2回）
2025（令和7）年2月12日	「早島町子ども読書活動推進計画」事業評価連絡会議講師として人間生活学部児童学科 片平朋世講師を派遣。演題：「子どもの育ちを支える大人として―“子ども”と“物語”の力を信じることから始めよう―」
2025（令和7）年2月22日	早島町立図書館公開講座講師として人間生活学部児童学科 片平朋世講師を派遣。演題：「お父さんといっしょ 絵本で楽しい子育て講座」（全2回）

3) NPO 法人こくさいこどもフォーラム岡山との活動実績

年 月 日	内 容
2024 (令和6) 年10月27日	国際塾卒塾式を本学にて実施。【詳細は活動報告に掲載】

4) 和気町との活動実績

年 月 日	内 容
2024 (令和6) 年8月2日	2024 年度和気町全教職員人権教育講演会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。

5) 岡山市との活動実績 (その1: 委嘱・依頼関係)

年 月 日	内 容
2024 (令和6) 年4月17日	岡山市「市民の童話賞」選考委員として人間生活学部児童学科 赤木雅宣教授が委嘱。委嘱期間 2024 年 4 月 17 日～2026 年 3 月 31 日
2024 (令和6) 年5月22日	令和 6 年度第 1 回岡山市栄養改善協議会学区・地区会長研修会講師として人間生活学部食品栄養学科 小見山百絵准教授を派遣。
2024 (令和6) 年6月16日	さんかくウィーク 2024「あなたは (も) まだ昭和の家族観？」講師として文学部現代社会学科 山下美紀教授を派遣。
2024 (令和6) 年7月1日	岡山市男女共同参画社会推進センター運営委員会委員として文学部日本語日本文学科 江草弥由起講師が委嘱。委嘱期間：2024 年 7 月 1 日～2026 年 6 月 30 日
2024 (令和6) 年7月1日	岡山市都市計画審議会委員として人間生活学部人間生活学科 濱崎絵梨准教授が委嘱。委嘱期間：2024 年 7 月 1 日～2026 年 6 月 30 日
2024 (令和6) 年9月1日	岡山市防災会議委員として人間生活学部人間生活学科 濱崎絵梨准教授が委嘱。委嘱期間：2024 年 9 月 1 日～2026 年 8 月 31 日
2024 (令和6) 年9月1日	岡山市国民保護協議会委員として人間生活学部人間生活学科 濱崎絵梨准教授が委嘱。委嘱期間：2024 年 9 月 1 日～2026 年 8 月 31 日
2024 (令和6) 年9月4日	令和 6 年度大学等メンタルヘルス連絡会講師として人間生活学部児童学科 青山新吾准教授を派遣。
2024 (令和6) 年9月4日	令和 6 年度大学等メンタルヘルス連絡会講師として人間生活学部児童学科 日下紀子教授を派遣。
2024 (令和6) 年9月25日	令和 6 年度岡山市栄養改善協議会学区・地区会長・副会長研修会講師として人間生活学部食品栄養学科 小見山百絵准教授を派遣。
2024 (令和6) 年9月27日	令和 6 年度岡山市栄養改善協議会学区・地区会長・副会長研修会講師として人間生活学部食品栄養学科 小見山百絵准教授を派遣。
2024 (令和6) 年10月17日	令和 6 年度岡山市栄養改善協議会学区・地区会長・副会長研修会講師として人間生活学部食品栄養学科 焰硝岩政樹准教授を派遣。
2024 (令和6) 年10月29日	北地域精神保健福祉連絡会講師として人間生活学部人間生活学科 中井俊雄准教授を派遣。

2024 (令和6) 年11月15日	岡山市基本政策審議会委員として人間生活学部児童学科 日下紀子教授が委嘱。委嘱期間：2024 年 11 月 15 日～2026 年 11 月 14 日
2024 (令和6) 年11月25日	岡山市立一之宮公民館主催子育てサロンにおける講習会講師として人間生活学部児童学科 片平朋世講師を派遣。
2025 (令和7) 年2月22日	岡山市立幸町図書館講座講師として文学部日本語日本文学科 中井賢一教授を派遣。演題：文学講座「源氏物語を楽しむ」
2025 (令和7) 年3月29日	岡山市立南公民館講座講師として文学部日本語日本文学科 山根知子教授を派遣。演題：「坪田譲治文学の魅力と岡山ゆかりの作品」

6) 岡山市との活動実績（その2：担当教員を介した連携活動）

年 月 日	内 容
2024 (令和6) 年6月～ 2025 (令和7) 年3月	岡山市「学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト」岡山観光ガールズ(担当教員:英語英文学科 植野貴志子)の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024 (令和6) 年6月～ 2025 (令和7) 年3月	岡山市「学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト」ツボジョーワールド探検隊(担当教員:日本語日本文学科 山根知子)の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024 (令和6) 年6月～ 2025 (令和7) 年3月	岡山市「学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト」nopak(担当教員:人間生活学科 大東正虎)の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024 (令和6) 年6月～ 2025 (令和7) 年3月	岡山市「学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト」ノートルダム清心女子大学ソーシャルデザイン研究会(担当教員:英語教育センター Christopher Creighton)の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024 (令和6) 年6月～ 2025 (令和7) 年3月	文学と児童福祉との連携事業～よむよむふむふむプロジェクト(担当教員:児童学科 日下紀子)の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024 (令和6) 年6月～ 2025 (令和7) 年3月	2023 年度文学によるまちづくり協働事業:日韓文化・文学交流(担当教員:村中李衣(元児童学科)、英語教育センター 高橋昌子)の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】

7) 総社市との活動実績（その1：委嘱・依頼関係）

年 月 日	内 容
2024 (令和6) 年9月24日	総社市立新本小学校外国語活動・外国語（英語）科の校内研究講師として人間生活学部児童学科 福原史子准教授を派遣。
2024 (令和6) 年10月9日	下倉小地域ケア会議研修会講師として人間生活学部人間生活学科 中井俊雄准教授を派遣。
2025 (令和7) 年1月30日	総社市教育研修所国語班研修会講師として人間生活学部児童学科 赤木雅宣教授を派遣。

8) 総社市との活動実績（その2：地域連携・SDGs推進センター直轄の活動 [清心コラボ]）

年 月 日	内 容
2024 (令和6)年4月15日	総社市政策調整課とセンター長が2024年度インターシップについて打合せ。
2024(令和6)年4月15日、5月17日、5月22日	Nサポで全在學生にインターシップの案内／参加者正式募集／関心アンケートを実施。
2024 (令和6)年8月6日	総社市インターシップ本学向け開講式。 出席者：総社市長他 津田葵学長、豊田尚吾副学長、センター長、学生12名
2024(令和6)年8月～9月	総社市役所各部署で学生がインターンを実施。【詳細は活動報告に掲載】
2025 (令和7)年3月11日	総社市インターシップ優秀政策提言表彰式において本学学生が表彰。 出席者：総社市長他、濱西栄司センター長、学生2名

2024 (令和6)年5月8日	そうじゃ吉備路マラソン実行委員・学生委員会の発足について、総社市文化スポーツ部担当とセンター長の打ち合わせ。
2024 (令和6)年6月13日	Nサポで全在學生に学生委員希望者募集(2～3名)。応募者3名の推薦。
2024 (令和6)年8月16日、9月26日、10月24日、12月26日、2025(令和7)年1月23日、3月12日他	そうじゃ吉備路マラソン・学生委員会の活動へ本学学生の出席。
2024 (令和6)年10月24日	そうじゃ吉備路マラソン協定大学枠ボランティアについて文化スポーツ部担当とセンター長の打ち合わせ。
2024 (令和6)年11月6日	Nサポで全在學生にボランティア参加募集。25日締切までに33名応募。
2025 (令和7)年2月13日	学内でボランティア向け説明会を実施。学生委員とセンター長から説明。参加学生に大学ウィンドブレーカーの貸与。
2025 (令和7)年2月23日	「2025 そうじゃ吉備路マラソン」に、本学学生33名及びセンター長がボランティア（「選手係」）として参加。

9) 株式会社天満屋との活動実績（地域連携・SDGs推進センター直轄の活動 [清心コラボ]）

年 月 日	内 容
2024(令和6)年8月24日、10月17日、11月11日、12月2日	天満屋地域連携事業部担当とセンター長のオンライン協議（2024年度方針の確認／商品企画選考／学生へのリクエスト／企画案へのコメント他）。
2024(令和6)年10月6日、10月20日	Nサポで在學生にアンケート／商品企画案募集を実施。7案から2案決定。
2024(令和6)年10月24日、12月3日、2025(令和7)年2月25日、3月10日	学内で参加学生6名とセンター長のミーティング（プレゼン練習等） ※学生6名内訳：日本語日本文学科（2年1名、1年1名）、現代社会学科（2年2名、1年1名）、人間生活学科（1年1名）
2024(令和6)年12月18日、2025(令和7)年3月18日	天満屋本店会議室において、参加学生・天満屋地域連携事業部担当・センター長のミーティング

1 0) 株式会社 TCC との活動実績（地域連携・SDGs 推進センター直轄の活動）

年 月 日	内 容
2024(令和6)年7月9日、 8月8日、9月13日	西日本旅客鉄道岡山支社・ジェイアールサービスネット岡山主催『おかやまふるさとおこし 探究ワークショップ』（企画運営：TCC 株式会社）について TCC 担当とセンター長の打ち合わせ。
2024（令和6）年9月26日	岡山南高校において、TCC 担当・本学入試広報部長・センター長が高校側担当と協議。
2024（令和6）年12月19日	岡山南高校において、文学部現代社会学科二階堂裕子教授が「高粱紅茶」の取り組みについて、またセンター長が事業について、高校生へ説明。

1 1) 赤磐市との活動実績（その1：委嘱・依頼関係）

年 月 日	内 容
2024（令和6）年11月29日	赤磐市立図書館職員研修講師として文学部日本語日本文学科 近藤友子准教授を派遣。

1 2) 赤磐市との活動実績（その2：地域連携・SDGs 推進センター直轄の活動〔清心コラボ〕）

年 月 日	内 容
2024（令和6）年4月7日	赤磐市との包括連携協定に基づく連携活動希望について教職員から募集（期限：3月27日～4月7日）
2024（令和6）年4月17日	学内で赤磐市政策推進課担当とセンター長の打ち合わせ。 赤磐市関連の各種取組（子ども食堂等）案内を掲示。
2024（令和6）年6月6日	学内で山陽団地活性化の取組み等について赤磐市政策推進課担当と文学部現代社会学科森泰三教授の打ち合わせ。
2024（令和6）年8月20日	学内で、新イベントワークショップへの学生派遣について赤磐市商工課担当とセンター長の打ち合わせ。
2024（令和6）年8月23日	Nサポで全在學生に参加者募集。2名が応募。 学生内訳：現代社会学科2年1名、1年1名
2024（令和6）年9月20日	「赤磐市を舞台にした新イベント検討会：ワークショップ」第1回に学生2名派遣。【詳細は活動報告に掲載】

1 3) 株式会社リョービツアーズとの実績

年 月 日	内 容
2024（令和6）年8月1日	包括的連携協力に関する協定の締結式を本学にて実施。 ※リバプール・ホープ大学関連の連携活動は国際交流センター管轄

1 4) 一般社団法人日本自動車連盟岡山支部 (JAF 岡山) との活動実績 (地域連携・SDGs 推進センター直轄の活動 [清心コラボ])

年 月 日	内 容
2024 (令和6) 年4月4日	自転車利用者ヘルメット着用率向上のためのヘアカタログの完成・動画公開の報道発表会 (於 JAF 岡山) にて学生が発表。山陽放送、瀬戸内海放送、岡山放送、NHK 岡山のニュースで報道。山陽新聞掲載。また 14 日に読売新聞の取材・掲載。
2024 (令和6) 年4月15日、4月22日	N サポで全在学生に 2024 年度参加学生募集 (3 名希望者)。事前ランチミーティングを実施。
2024 (令和6) 年4月26日	清心高校「自転車利用者の集い」にて、JAF 岡山がヘルメット着用啓発、本学学生がヘアカタログのプレゼン。その後、効果測定を実施。
2024 (令和6) 年5月30日	JAF 岡山で 2024 年度第 1 回ミーティング (継続 3 名。新規 2 名) 日文 3 年 1 名、現社 3 年 1 名・2 年 1 名、人間 3 年 1 名、児童 3 年 1 名
2024 (令和6) 年6月18日、6月27日	JAF 岡山より交通安全ドレミぐるーぷ公演について清心幼稚園での実施相談。センター長が幼稚園長に相談。
2024 (令和6) 年7月～10月	包括連携協定の内容・式日時等についての協議。学内審議等。
2024 (令和6) 年7月9日、7月17日	JAF 岡山ドレミぐるーぷ公演でのイラストパネルを学生募集提案／N サポで全在学生からイラスト制作者募集 (1 名が応募)
2024 (令和6) 年9月11日	JAF 岡山ドレミぐるーぷ公演 (三門幼稚園) に、イラスト制作学生、センター長が出席。
2024 (令和6) 年11月18日	ヘアカタログのための写真撮影を本学にて実施。
2024 (令和6) 年11月20日 午前	JAF 岡山ドレミぐるーぷ公演を本学附属幼稚園にて開催。学長、センター長が出席。
2024 (令和6) 年11月20日 午後	包括的連携協定締結式を本学にて実施。【詳細は活動報告に掲載】 出席者：JAF 岡山支部長他 津田葵学長、豊田尚吾副学長、センター長、学生他 日刊工業新聞、日刊自動車新聞、KSB、RSK、TSC 等の取材。

2. 地域連携活動報告（一部）

（1）各連携協定に基づく活動（締結順）

【NPO 法人こくさいこどもフォーラム岡山との包括的連携協定に基づく活動】

2024 年度「国際塾」の報告

児童学科／福原史子

（NPO 法人こくさいこどもフォーラム岡山理事）

岡山県下の高校生たちが、日本人としてのアイデンティティと国際感覚を兼ね備え、グローバル社会に適応できる人材に育つことを目指す「こくさいこどもフォーラム岡山（INTERKIDS、会長／秋政孝一）」は、活動の一つとして「国際塾」を毎年開催している。これまでに約 650 名の修了生を輩出しており、2024 年度は、21 期生として 56 名（中学生 6 名を含む）を迎えて、国際問題や文化などを学び、幅広い視野や考える力を身に付けられるよう 11 回の多彩な講座を企画し実施した。本年度のカリキュラムは表 1 に示す通りであった。“How Can We Foster Innovation in Okayama?” を全体のテーマに設定し、10 月 27 日（日）に本学ヨゼフホールを会場に実施された卒塾式において、4 グループが英語でプレゼンテーションを行った（図 1・図 2）。

さらに、12 月 15 日（日）には、特別講座として岡山コンベンションセンターにおいて「SDGs と私～今、私たちにできること・提案したいこと～」をテーマに「ESD カフェ URA2024」を主催した。岡山県下の 19 校から 128 名の生徒がエントリーし、当日は生徒 114 名およびアドバイザー・引率教員・来賓・世話人等 47 名、総勢 161 名が参加する大盛会となった。17 の小グループに分かれ、各テーブルには各界からのアドバイザーが加わり、SDGs の 17 の目標についてディスカッションをした後、Google Slide にまとめ発表した。



図 1 2024 年度第 21 期卒塾式・本学ヨゼフホール



図 2 英語プレゼンテーションの様子

新年度は、本学トリニティーホールにて5月18日（日）に入塾式、11月24日（月・振休）に卒塾式が予定されている。学ぶ意欲と志の高い高校生らが集う国際塾であることから、本学の多彩な学科の魅力や施設・設備の充実度を体感いただき、入学希望へとつなげたい。

表1 2024年度第21期「国際塾」のカリキュラム

第21期 国際塾2024 カリキュラム			2024/11/2
NO	期日	テーマ	開催場所
第1回	5/19（日）	入塾式 & 入塾パーティー 杉山 慎策 国際塾塾長（就実大学名誉教授） 卒塾生先輩からのエール（国際塾で学んだこと・今までにやっていたこと・これからの夢） ・福寺 航大（九州大）、福田 ころこ（同志社女子大）、霜山栗都乃（ジャバネットたかた） ・福田 ころこ（清心女子高校→同志社女子大学現代社会学部3回生） ・霜山栗都乃（清心女子高校→お茶の水女子大学理学部生物学科卒→ジャバネットたかた） 2024年度課題の提起 「私たちはどうすれば岡山でイノベーションを興すことができるのか？」 “How can we foster innovation in Okayama?”	岡山理科大学 50周年記念館 3F会議室 2F会議室
第2回	6/9（日）	「好適環境水」による甲殻類・魚類養殖の最新研究 山本 俊政 岡山理科大学 生命科学部生物学科 准教授	岡山理科大学 50周年記念館
第3回	7/7（日）	吉備国を知ろう！～埴輪の元になった特殊器台は吉備で生まれた～ 伴 祐子 学芸員（倉敷考古館）	倉敷考古館 & 大原本邸
特別 講座	7/29（月） 13:30-16:30	イタリア・ベルガモ市・ファルコーネ高校生との交流（22名来岡） 国際塾塾生と岡山県内各高校生とともに交流しよう！	岡山国際交流センター 7F多目的ホール
第4回	8/4（日）	イスラエル・パレスチナ問題について考える！ 鈴木 啓之 先生（東京大学中東地域研究センター特任准教授）	岡山国際交流センター 7F多目的ホール
第5回	8/11（日）	平林金鳳の取り組みとSDGs～持続可能な社会に向かって～ 平林 茂 先生（関平林金鳳 会長）	岡山国際交流センター 7F多目的ホール
夏季 合宿 研修	8/17（土）	①「英語プレゼンテーションを始めよう！」 藤代昇丈 中国学園大学 国際教養学部教授 ②「超AI時代の働き方～仕事は自分でつくるもの」 旦 知子 代表（Dan.style） ③ドキュメンタリー映画「百姓の百の声」 原田順子 農山漁村文化協会中四国支部長 ④「志」授業で「お役立ち山（未来設計図）」を作成しよう 多田章利 先生（岡山理科大学非常勤講師） ⑤2024年度課題「私たちはどうすれば岡山でイノベーションを興すことができるのか？」 ディスカッション ワークショップ：塾生たちのクリエイティビティを試してみよう！ “世の中にない全く新しい消しゴムのアイデアを出す”	関谷学校 県青少年教育センター
	8/18（日）	⑥坐禅入門～その意義と坐り方を学ぶ 臨済宗少林寺（国庫） 曹山泰玄 和尚 ⑦「100種類以上のぶどうを育てる農家が描く22世紀の日本の農業」 観林ぶどう研究所 林 慎悟 代表	臨済宗少林寺 津高公民館
第6回	9/1（日）	英米トップスクール留学への道 松田 悠介 先生 Crimson Education Japan 社長、日経ビジネス「今年の主役100人」（2014） Crimson Global Academyオランダ・インターナショナルスクール日本代表	岡山国際交流センター 7F多目的ホール
第7回	9/15（日）	「我が国・世界の経済情勢と中央銀行の役割」 廣瀬 敬久 先生（日本銀行岡山支店長）	岡山国際交流センター 7F多目的ホール
第8回	9/21（土） 14:00-16:00	駐日大使との対話②～セルビア 中東欧のリーダー国 その魅力と可能性 セルビア共和国 アレクサンドラ・コヴァチュ 駐日特命全権大使 コーディネーター：逢沢一郎 衆議院議員（日本セルビア友好議員連盟会長）	岡山後楽館高校 中講義室
第9回	10/13（日） 9:30-16:45	「外国人とともに暮らす社会について考える！」 留学生・在留外国人と学ぶワークショップ、基調講演とディスカッション、グループによる発表 その他在留外国人アドバイザー参加 （ウチ・オア・ホ・オーストリア・ドイツ・韓国・ブラジル・中国・フィリピン・ミャンマー・ベトナム） ＜基調講演＞ ①譚 俊偉（総社市市民生活部人権・まちづくり課国際交流推進係～総社市における多文化共生への取り組み） ②安井 誠（日本社会設計 代表、経団連外国人政策委員会メンバー）～コンビニを多文化共生の拠点に ③林原エヴリン（オーストラリア）・ニコラス（ドイツ）～2015年の難民危機：ヨーロッパへの影響と日本への教訓 ④田口順一（グラスルーツ行政書士事務所代表）～外国人が日本で暮らすしていくために必要なもの ＆外国人未就労児童対象INEの活動について	岡山国際交流センター 地階レセプションホール
第10回	10/20（日） ①10:00-11:00 ②11:15-12:45	・10/27最終プレゼンへのチーム別ミーティング ・「人生、ずっとチャレンジ」 木村 正明 先生 講座 例ファジアーノ岡山スポーツクラブ ファウンダー オーナー、前日本プロサッカーリーグ専務理事 東京大学先端科学技術研究センター特任教授、元ゴールドマンサックス執行役員	岡山国際交流センター 7F多目的ホール
第11回	10/27（日） 9:30-14:00	2024年度課題 「私たちはどうすれば岡山でイノベーションを興すことができるのか？」 “How can we foster innovation in Okayama?” ＜英語によるチーム別プレゼン＞ 卒塾式 & 卒塾パーティー 杉山 慎策 国際塾塾長（就実大学名誉教授） 審査員：藤代昇丈 中国学園大学国際教養学部教授、中川美由貴 啓心塾塾長	ノートルダム清心女子大学 3Fゼミホール、1Fラウンジ
特別 講座	12/15（日） 9:30-16:30	ESD Café URA 2024 「SDGsと私～今、私たちにできること・提案したいこと～」 岡山県下中高高校生と社会人が17の目標についてディスカッションし、グループ別発表	岡山コンベンションセンター ままかりフォーラム

★毎回、冒頭で塾長講話（経営学ミニ講座）が行われる予定
★講座は10:00～12:00ですが、12:00～13:00には希望者のみ講師の方と膝を交えて語り合う時間（茶話会）を設ける場合があります。
★合宿費用は、年間受講料とは別途必要となります。
★開催期日と場所は、変更する場合があります。

【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：学生イノベーションチャレンジ】

〔岡山観光ガールズ〕

—外国人旅行者に「観光地・宿泊地」としての岡山の魅力を発信—

英語英文学科 植野貴志子

1. 概要

「岡山観光ガールズ」は、文学部英語英文学科3年生の有志8名（生田夏樹、岡田ひより、坂田依里奈（代表）、中曽陽菜、原田夏実、藤井美花、藤原みなみ、山部莉央）による団体である。本団体では、岡山市を訪れる外国人観光客の宿泊促進を目的に、英語を活用した情報発信と観光プランの開発を行った。

観光庁の「宿泊旅行統計調査」（2023年）によると、岡山県の外国人宿泊者数は約6万人と、近隣の兵庫県（約29万人）や広島県（約16万人）に比べて少なく、和歌山県と同程度にとどまっている。この状況を受け、岡山市内の宿泊促進を目指し、英語による情報発信と観光体験の充実を図るための活動を発案した。

2. 活動内容

2024年前半、留学生を含む外国人を対象にアンケート調査を実施し、岡山の観光地としての魅力と課題を明らかにした。気候が良く食べ物が美味しいといった長所が挙げられた一方で、英語での情報が不足していることや、夜に楽しめる場所が少ないと感じる外国人が多いことが判明した。

この調査結果を踏まえ、2024年11月に「岡山1day ツアー」を企画・実施した。ツアーには日本に来て間もない留学生4名が参加した。協働先である「ゲストハウス KAMP」での日本食作り体験や、岡山城、後楽園、吉備津神社での観光を盛り込み、岡山の魅力を体験できるよう工夫した。また、英語での情報発信を行うために、2024年9月に公式Instagram（@okayama_kanko_girls）を開設し、岡山市内の飲食店や観光地を紹介した。加えて、2025年2月には、夜遅くまで営業している奉還町エリアのカフェ・バー・レストランを紹介するリーフレット『Hokancho Nightlife』を作成し、岡山での宿泊を促進する取り組みを行った。

これらの活動を通じて、岡山の観光資源の魅力を再確認しながら、外国人観光客向けの情報提供を強化することができた。リーフレット『Hokancho Nightlife』を活用して奉還町エリアへの外国人観光客の誘致を図ることで、岡山市内の宿泊促進が期待される。

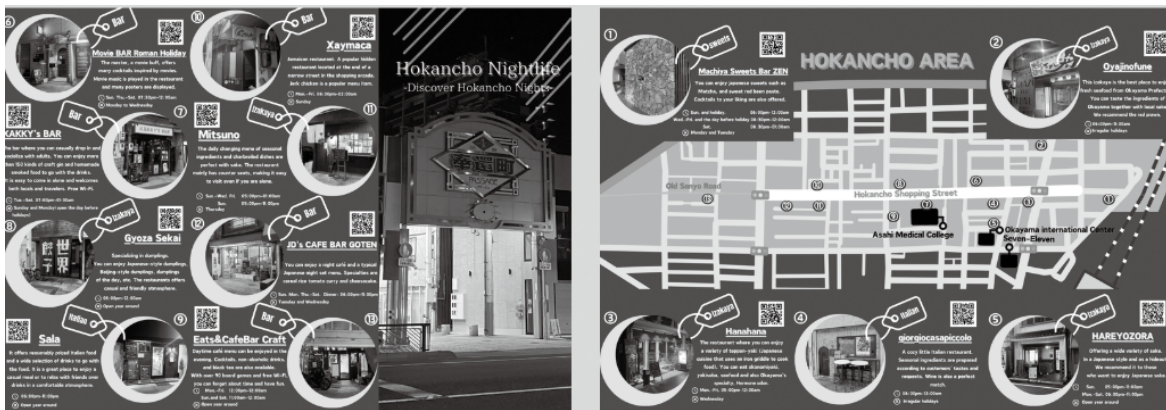
3. 参加者の成長

活動を通じて、参加者は計画立案や実施、広報、交渉などのスキルを身につけることができた。特に、「ゲストハウス KAMP」との協働を通じて、実践的な社会経験を積む機会を得た。また、公式インスタ

グラム運営を通じて、不特定多数の人に向けた情報発信の重要性を学ぶことができた。さらに、公的資金を活用する意義と責任を深く理解することができた。

4. 今後の展望

今後も公式インスタグラム（@okayama_kanko_girls）を運営し、観光や日本文化に関する情報発信を継続していく予定である。また、リーフレット『Hokancho Nightlife』の需要調査を行い、設置場所の拡大や増刷を検討しながら、外国人旅行者の岡山市内の宿泊促進を目指して活動を発展させていきたい。



リーフレット『Hokancho Nightlife』



公式インスタグラム（@okayama_kanko_girls）

【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：学生イノベーションチャレンジ】

【ツボジョーワールド探検隊】

—「文学創造都市おかやま」としての坪田譲治普及活動—

日本語日本文学科 山根 知子

「ツボジョーワールド探検隊」8年目のチャレンジ —文学と福祉との接点—

「ツボジョーワールド探検隊」8年目にあたる2024年度は、岡山市が「ユネスコ創造都市ネットワーク」〈文学〉分野に加盟して「文学創造都市おかやま」を掲げて最初の年であることを意識しての活動となりました。「ツボジョーワールド探検隊」の学生は、これまでも岡山市が文学に力を入れる動きの一助となるよう毎年岡山市文化振興課との協働を進めていましたが、さらに新たな「文学創造都市おかやま」の動きにいかに関与できる活動にするかを考えていました。

こうしたなかで今年度は、福祉の活動に及ぶ希望を抱いていた日本語日本文学科の学生が、岡山市社会福祉協議会との協働を積極的に考えたことから、学生イノベーションチャレンジ事業への事業名を「坪田譲治の〈逆境を心豊かに生きる文学〉発信！—福祉との接点をさぐる文学普及活動—」として応募し、そのキーワードを〈よりそう心〉と決めました。

この方向性を具体化する経緯では、偶然とは思えない導きがありました。それは、日本語日本文学科のかつての私のゼミ生で「ツボジョーワールド探検隊」の3年前のメンバーでもあった卒業生による導きでした。彼女は、岡山市社会福祉協議会に就職しており、昨年度、人間生活学科の社会福祉学専門の中井俊雄先生の授業で特別講義講師として現場の仕事について話すと教えてくれたので、私もその授業に参加しその姿を見守っていたのでした。

彼女は、卒論で小川未明の文学を研究していました。未明文学のなかでも社会的弱者へのまなざしに注目し同時代資料を活かした大変緻密な卒論を書き上げた当時、就職活動をしていた彼女は、岡山市社会福祉協議会への就職を決めた心境について、これから向おうとする福祉の世界とは、卒論で知った未明の思いを、現代において考え実行できる場であると考えたと伝えてくれたのを思い出します。

こうして、彼女に福祉の実態を聞きながら、今年度の事業に期待する学生の思いがいかに関与できるか相談させてもらいました。その結果、岡山市社会福祉協議会の福祉の店「元気の輪」との協働事業が実現し、文学と福祉との身近な接点を学生たちと模索できたのでした。

しかも、福祉の世界の難しさを乗り越えることのできる人の心とは、文学で求められ描かれている〈よりそう心〉であると確信することができました。譲治以外にも取り上げることにした2作家のうち小川未明は、譲治が大学時代から未明が亡くなるまで約50年間の交流を続けた、まさに文学上の恩師です。譲治は未明の〈よりそう心〉への思い入れを知りつつ、また譲治自身も未明の悲しい体験やその文学に寄り添っていた事実があり、その心が譲治文学にも結晶しています。加えて譲治は、宮沢賢治の〈よ

りそう心」を詩「雨ニモマケズ」や童話に見出し、それらを賢治没後初めて、子ども向け童話集『風の又三郎』（羽田書店）に編んで刊行することに尽力しました。

学生たちは、譲治の〈よりそう心〉をめぐって、未明と賢治への思いを紹介することも大切であると考え、こうした譲治とその文学の〈よりそう心〉によってこの事業の精神を貫くことができるという確信を得ることができました。

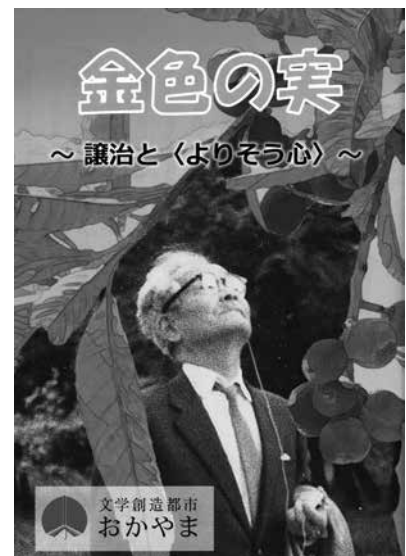
福祉関係については、譲治と同時代を生きた岡山ゆかりの人で、国内初の〈よりそう心〉による先進的活動を行った岡山孤児院創設者である石井十次、救世軍で社会鍋を始めた岡山出身の山室軍平の情報を発信しました。さらに岡山の福祉において国内初といえば、岡山は民生委員制度の発祥の地です。そこでこの制度の起こりとなる済世顧問制度創設に尽力した岡山県知事・笠井信一と藤井静一の働きについて紹介し、その延長線上にある岡山市社会福祉協議会の紹介につなげました。こうした方面での冊子記事内容においては、人間生活学科の杉山博昭先生と中井俊雄先生にご指導いただくことができました。

文学と福祉に通底する坪田譲治の精神

今年度の8冊目となる坪田譲治紹介冊子は、『金色の実—譲治と〈よりそう心〉—』と題して、以上のようなテーマにより構成しました。

それに関連する譲治の人生については、譲治が最も貧困時代に子ども3人を育てた苦悩と愛情が子どもたちの心にゆたかに受けとめられていた親子関係を盛り込みました。譲治の作品紹介では、貧困や戦争を背景にした逆境のなかで生まれた作品のなかから、譲治の思い入れの深い岡山のくだものが作品の登場人物の心によりそって描かれた作品が多いことを示しました。

さらに、冊子の表紙においては岡山市の「文学創造都市おかやま」のロゴを配置して、岡山市が「文学による心豊かなまちづくり」を進める事業の一環としての活動であることを示しました。



坪田譲治の心テーマ 研究小冊子を刊行 清心女子大生グループ

岡山市出身の児童文学作家坪田譲治（1890～1982年）について学ぶノートルダム清心女子大（同市北区伊福町）の学生グループ「ツボジョーワールド探検隊」が、研究をまとめた小冊子「金色の実～譲治と〈よりそう心〉」を刊行した。

メンバーは日本語日本文学科の3、4年生7人。譲治の「よりそう心」をテーマに、家族や古里を愛し、子どもたちの豊かな成長を願って執

筆した作品世界を読み解いている。戦地の息子に思いをはせる父の心をつづった「桃の実」や、柿の木に登って父母の帰宅を待ちわびる子どもの姿



学生が研究をまとめた小冊子「金色の実」

がいじらしい「ケイちゃんとかきのたね」など、愛と思いやりに満ちた童話を解説。わが子を亡くした悲しみを物語に昇華させた小川未明、貧しい農民らに心を寄せた宮沢賢治ら作家たちとのきずなのほか、石井十次や山室軍平といった福祉に尽くした郷土の先人も紹介している。

3年馬越美佳さん（22）は「子どもを何より大事に思う譲治の心を多くの人に知ってほしい」と話す。

A5判、2000部作成。岡山市立の小中学校や県内の図書館に配布する。問い合わせは同大の山根知子教授（yamane@m.ndsu.ac.jp）。（則武由）

「坪田譲治の心テーマ／研究小冊子を刊行」（『山陽新聞』2024年11月12日）

大学の知を地域に拡げる大学生の力

「ツボジョーワールド探検隊」が2017年から8年間継続した活動は、『山陽新聞』に「地域と大学」を結ぶ活動として記載されました。この活動の意義は、〈文学〉による「ユネスコ創造都市」の使命と重なり、人が置かれた場で生きがいをもって生きる基盤に深く触れる〈文学〉を地域で共有することから実現する〈心の平和づくり〉にあると思われます。

1979年に坪田譲治を文学者として初の名誉市民とした岡山市は、譲治が岡山での心の体験を生きがいとして生み出した〈文学〉の価値を認め、没後2年を経た1984年には坪田譲治文学賞を創設して今日まで40年継続しています。そのうちの近年8年間、岡山市が大学で〈文学〉を学ぶ若者ならではの力として「ツボジョーワールド探検隊」の活動に期待して共に歩み、地域からもあたたかく見守られたおかげで、学生たちは力をわき立たせ「ユネスコ創造都市」加盟の達成とスタートの一助になったことに自信を増しています。

こうして学生たちは、附属図書館の「坪田譲治コレクション」を基盤にもつ本学の研究環境から譲治文学を地域へと浸透させる普及活動によって、内面の成長を顕著に遂げることができました。「地域と大学」との双方向の相乗効果を生み出したこれまでの実績が土台となって、〈文学〉ならではの〈心の平和づくり〉が今後いっそう深まることを願っています。

坪田譲治の魅力 分かち合う



紙芝居の練習をするツボジョーワールド探検隊のメンバー

山根知子教授

知を生かす 地域と大学

岡西公民館

ノートルダム清心女子大「ツボジョーワールド探検隊」



お熱ちゃん〜きん〜に参加した学生たちは、かつて坪田が通った能登川用水の環境を地域住民と共に調べた。(2023年10月)



学生が講座 住民楽しみに



坪田の関連資料を展示・保管する「坪田譲治コレクション」

自筆原稿、初版本… 資料そろえ研究支援

大学付属図書館

「坪田譲治の魅力 分かち合う」『知を生かす—地域と大学—』（『山陽新聞』2024年8月25日）

ツボジョーワールド探検隊活動日程

月	日	活動名	場所	活動内容
4	11	ツボジョーワールド探検隊 8 期生結成	本学	・本年度の活動方針について話し合い開始
	18	ミーティング	本学	・全体のテーマについての検討 ・今後の展望についての相談
	25	ミーティング	本学	・全体のテーマの再検討
5	9 ～ 23	ミーティング	本学	・申請書について話し合い ・活動テーマ「坪田譲治の〈逆境を心豊かに生きる文学〉発信！ー福祉との接点をさぐる文学普及活動ー」に決定 ・具体的な活動の検討 ・協働先の検討
	30	ミーティング	本学	・今後のスケジュールの決定 ・冊子のテーマを決定
6 ～ 8		冊子作成	本学	・冊子執筆 ・『金色の実～譲治と〈よりそう心〉～』題名決定 ・坪田譲治紹介冊子の原稿完成
9	4	印刷所入稿	本学	・完成版データを印刷所へ
	24	冊子納品	本学	・2000部納品
	30	冊子配布	岡山市立北公民館	・冊子配布
10	12	お魚ちょ～さ隊	能登川用水	・坪田譲治のゆかりの地の川での活動（用水路内に生息する生物の調査）と冊子配布
	17	岡西公民館との打ち合わせ	本学	・プログラム・設備使用についての確認
	20	中間報告会	岡山コンベンションセンター	・これまでの実績報告
	26	岡西公民館講座	岡西公民館	・14：00～ 冊子配布による講座「坪田譲治の文学から楽しく学ぶ〈よりそう心〉」 ・15：30～ 岡山市社会福祉協議会福祉の店「元気の輪」販売
	28	石井小学校全児童への冊子贈呈	石井小学校	・8：25～ 放送朝会にて冊子紹介と全校児童への冊子贈呈式
11	10	岡山でのユネスコ活動30年の歩みから文学による心豊かなまちづくり・人づくり	ハレノワ小劇場	・冊子配布
12	7	岡山市文学賞 市民の童話賞表彰式	西川アイプラザ	・冊子配布
2	6	岡山市へ提出する報告資料作成	本学	・22日の資料および月末締切の最終実績報告書作成
	22	岡山市 最終報告会	岡山市役所	・発表と冊子配布
3	8	岡山市文学賞 坪田譲治文学賞贈呈式	西川アイプラザ	・冊子配布

【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：学生イノベーションチャレンジ】

人間生活学科経営経済学コース大東ゼミ（団体名「nopak」）

「食品ロス軽減のためのエコロジカルなソーシャルビジネスプロジェクト」の報告

人間生活学科 大東 正虎

岡山市の令和6年度学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクトにおいて準グランプリを受賞した。

活動概要

1) 実践的な学びと地域貢献を両立したビジネスに挑戦

人間生活学科経営経済学コースは、座学とともに実践活動を重視している。本事業では、経営学やマーケティングの知識を深めるとともに、地域に貢献することを目的とした。岡山市の学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクトにスモールビジネスチャレンジでエントリーし、岡山市内で生産されながらも市場に出回らない規格外果物を活用したアイスの製造・販売事業を実施した。

2) 食品ロス軽減を目指した地域資源の有効活用

地域貢献として岡山の名産品である果物の食品ロス軽減に着目した。例えば、桃は傷つきやすく、苺やぶどうは粒の大きさや形によって規格外となることが多い。この課題に対し、新鮮な果物を迅速に加工・冷凍し、アイスとして商品化することで、保存性と商品価値の向上を目指した。

3) 事業計画の具体化と実践

事業化に向けては、損益分岐点分析を実施し、岡山市内で「CRAZY ICE-CREAM」を展開する「クォーターションマーク株式会社」に相談しながら事業計画を何度も練り直した。また、農家との交渉を重ね、岡山市内で収穫された規格外のマスカット、桃、いちごを仕入れ、自らの手で皮むきや種取りを行い、即時冷凍した（写真1）。さらに、アイスクリーム製造工場で果物殺菌後、ミルクとの混合作業を経て、アイスの試食と調整を繰り返しながら商品化を進めた（写真2）。店舗名を「Okayammy Ice Cream」とし、アイス販売を地産地消のマルシェなどで行い、売上目標を達成した（写真3）。結果的に、岡山市の補助金を使わずに事業化できることを示した。



写真1 農家から桃の受け取り



写真2 アイスの試食



写真3 販売活動

この活動を通じて、地元のみならず海外の人々にも岡山市内産の果物の魅力を伝えることができた。本事業に参加した学生たちは、ビジネスの立ち上げから生産、流通、販売、在庫管理、プロモーション、会計、ブランド志向、組織運営に至るまで、経営に必要なスキルを実践的に習得した。

4) 学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト活動報告会

2025年2月22日の報告会には18グループ、約100名の学生が参加し、各チームが6分間のプレゼンテーションを行った（写真4）。金融機関関係者を含む審査員による厳正な審査の結果、取り組みが高く評価され、準グランプリを獲得した（写真5）。



写真4 活動報告会での発表



写真5 準グランプリ受賞

5) 岡山市長表敬訪問

準グランプリの表彰を受けて、2025年3月10日に岡山市長を表敬訪問し、これまでの活動内容および今後の展望について説明した（写真6）。



写真6 岡山市長表敬訪問

6) マスコミへの出演

市長表敬訪問後に、山陽新聞社から取材を受けた。また、岡山市より市政広報番組への出演依頼があり、地上波のテレビおよびYouTubeにて活動の様子が放映された。

【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：学生イノベーションチャレンジ】

犬島ソーシャルデザイン研究グループ：持続可能性、コミュニティ、自立の促進

英語教育センター C.J. クレイトン

概要

ノートルダム清心女子大学（NDSU）を拠点とする「犬島ソーシャルデザイン研究グループ（以下本グループ）」は、体験型学習、地域協働、持続可能性の取り組みを組み合わせた活動を行っています。本グループは、NDSU「地域連携・SDGs推進センター」の目的と一致し、地域開発やグローバルな持続可能性への参加を促進しています。構造化された活動を通じて、参加者はソーシャルデザイン、異文化コミュニケーション、環境意識に関するスキルを磨きます。本プログラムの成功には、学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト（<https://www.city.okayama.jp/shisei/0000058464.html>）、NDSU 地域連携・SDGs 推進センター、および公益財団法人福武教育文化振興財団の財政的・組織的支援が不可欠でした。

課題

岡山市にある犬島は、過疎化、環境問題、経済停滞に直面しています。これらの課題を解決するためには、コミュニティの持続と文化遺産の保全に向けた革新的なアプローチが必要です。このような解決策は、日本や世界の他の地域でも応用可能です。本グループの主な課題は、地域住民との関係構築でした。

活動と協働

本グループは、ソーシャルデザイン、環境再生（ガーデニングや竹の管理など）、文化交流、料理活動に焦点を当てた6回のワークショップを犬島で実施しました。参加者にはNDSUの現役学生、高校生、地域住民、留学生が含まれ、異文化・異世代間の理解、地域参加、社会的責任を育むための交流が行われました。

イベントと参加

活動内容には、コミュニティガーデンのづくり・維持、地域住民とのパン焼きやピザ作り、海岸清掃と竹除伐などの環境持続プロジェクト、犬島精錬所美術館（<https://benesse-artsite.jp/en/art/seirenscho.html>）訪問などの文化交流が含まれます。第6回ワークショップはNDSUの学生が企画・運営し、高校2年生に向けてソーシャルデザイン、環境責任、文化交流を紹介する教育的な活動を行いました。学生たちはリーダーシップと自立性を大いに発揮しました。

協働と実践的なプロジェクト：

ガーデニング、料理、島のツアーなどのチーム活動が行われ、参加者からは「グループで何かを成

し遂げる喜びを感じた」「メンバーと素晴らしい経験を共有できた」といった声が寄せられました。犬島くらしの植物園 (<https://benesse-artsite.jp/en/art/lifegarden.html>) での活動や清掃プロジェクトを通じて、協働の重要性を学びました。

学生のリーダーシップと自立性：

参加者はガーデンの設計からワークショップの運営まで自主的に取り組み、特に高校生は「初めて自分たちで計画を立てる楽しさ」を実感しました。NDSU の学生はリーダーシップを発揮し、高校生参加者を指導しました。

異文化交流と地域との関わり：

各セッションでは、地域住民や留学生との交流が行われ、共通の趣味や価値観を発見しました。例えば、昼食時に「国籍は違うけど同じアイドルが好きだと知り、嬉しかった」という声もありました。最初は消極的だった学生も、簡単な会話を通じて自信をつけていきました。



花束の作り



お茶用のハーブを摘む



26人の島民の一人と料理する



竹除伐

成果

ワークショップの効果：

事前・事後アンケートでは、高校生の社会問題や環境持続性への意識が向上し、チームワークやコミュニケーションへの自信が高まったことが確認されました。

地域と歴史への理解深化：

参加者は「岡山に20年住んでいても犬島のことを知らなかった」と気づき、地域の持続可能性について考えるきっかけを得ました。

ソーシャルデザインの理解：

「誰かを思いやる気持ちが行動が変わるとき」という気づきを得た学生もあり、地域課題の解決には人間関係の構築が不可欠であることを学びました。

個人の成長：

野外調理やワークショップの企画など、初めての経験を通じて自信をつけた参加者も多く、「次はもっと積極的に英語で話したい」といった意欲的な声も聞かれました。

今後の関与への意欲：

多くの参加者が「犬島のことを忘れずに伝えたい」「また参加したい」と述べ、継続的な関与への意欲を示しました。

NDSU 地域連携・SDGs 推進センターとの連携

本グループの活動は、質の高い教育（SDG 4）、持続可能な都市とコミュニティ（SDG 11）、目標達成のためのパートナーシップ（SDG 17）など、複数のSDGsに合致しています。

今後の方向性

参加者からのフィードバックを踏まえ、より体系的な二言語交流や持続可能性プロジェクトの継続が求められています。犬島ソーシャルデザイン研究グループは、NDSU 学生と地域コミュニティ双方にとって、今後も有意義な影響を与え続けることを目指しています。

助成



公益財団法人

福武教育文化振興財団

本プロジェクトは、[公益財団法人 福武教育文化振興財団] の助成金により実施されました。

【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：その他】

3年間の日韓文学交流から見えてきたもの —両国の言葉の奥にあるものを見つめ味わい直す—

ノートルダム清心女子大学非常勤講師 村中李衣

自立力育成ゼミⅥの授業と文学創造都市おかやまの協働事業として、韓国釜山外国語大学学生とノートルダム清心女子大学の学生の文学交流を始めて3年目になる。ユネスコへの文学都市登録を念頭に置いた本事業の計画は、海峡を挟んださまざまな人々とのご縁によって、一年ごとにその厚みを加えてきた。1年目は、日韓の学生がペアを組んで、複数回の個別交流を行うグループと、日韓の児童文学に関わる研究発表を行うグループに分かれて、実践を重ねる形をとったが、2年目からは、すべての学生が個別交流と全体での研究発表およびパフォーマンスを経験する形にバージョンアップされた。その陰には、コロナ禍をくぐり抜けたことで、生の思いを伝えあう機会を多様に作りあい、交流の網の目を繊細に紡いでいくことの重要性を両国の教員・そして学生たちが強く感じるようになったことがあげられる。

2024年3月には、完成した交流報告書を携えて村中が釜山外国語大学を訪れ、ノートルダム清心女子大学の学生たちの思いを直接に伝え、また文学の現地授業も実施することができた。実は本交流事業の大きな橋渡し役となってくださったおひとり、釜山外国語大学の堀ひろこ先生は、本学の卒業生でもあられた。このご縁のおかげで、初めての交流先であったにもかかわらず、絶大なる信頼関係の下、それぞれの大学の学生たちが安心して学びを深めあうことができた。ところが、今年、残念ながら堀先生は急逝され、突然襲った哀しみの中、両大学の学生は、天国で見守ってくださっているに違いない堀先生のためにもより充実した交流をと非常に熱のこもった実践を続けることとなった。

ペアでの個人交流では、Bae 講師が毎週交流に先駆けディスカッションテーマを複数設定し徹底した資料作りを指導してくださったおかげで、昨年までより一層交流の中身が濃いものとなり、単なる趣味や学生生活に関するものにとどまらぬ意見交換が活発になされた。そして、全体交流では今まで実践のなかった「K ポップの歌詞を歌いやすいように翻訳し、実際に歌唱を披露する」という新たな挑戦が本学の学生によって行われた。単なる直訳でなく、メロディーやリズムを考慮しながら、日本語の歌詞を創りあげていくことで、韓国語のみならず母国語の特徴にも改めて気づかされた多くの学生が報告している。また、アニメのアフレコや童話朗読などを含め日ごろの日本語学習の成果をのびのびと発表してくれた韓国大学生たちのプレゼン能力の高さと積極性にかなりの衝撃を受け、学びに対する姿勢を改めるきっかけになったとも口々に述べていた。この体験はおそらく今後、グローバル化の時代を彼生きる彼女たちの力になってくれるであろうと信じている。

最後に、3年間日韓の交流に関わるコーディネーターとしてご尽力くださった、釜山外国語大学の二色博樹先生と、交流の一部始終を見守り発表会当日もご参加くださった岡山市文化振興課のみなさまに深謝申し上げる。



釜山外国語大学にて
現地交流授業を実施



交流を実施した先生や学生たちと
釜山外国語大学にて意見交換



初回 Zoom 交流時の日本側学生



初回 Zoom 交流時の韓国側学生

【岡山市との包括的連携協定に基づく活動：その他】

2024年度 文学によるまちづくり協働事業 よむよむふむふむプロジェクト活動報告

児童学科 日下紀子

2023年に始まった「よむよむふむふむプロジェクト」は、岡山聖園子供の家の皆様と岡山市文化振興課のご理解ご協力によって2年目に入りました。大学生は昨年より継続して活動している2年生が中心になり、グループで子どもたちと関わる時間を持ちました。教員二人は、小・中学生と個別にかかわる時間を継続しています。そのなかで絵本を読む楽しさを分かち合い、日ごろは心の内側にしまい込んでいた気持ちをゆっくり外に出してみる機会と場所が整い、「福祉・文化・教育が融合」する営みとなっています。1対1で読みあいを楽しみ、心に浮かんだ言葉を綴り詩にしたり、イメージする絵を描いたりなどの創作時間が増えてきました。互いに語り合うなかで子どもたちの表情が明るく輝く瞬間は、私たちの心にも灯がともるような明るさと温かさが訪れました。

学生たちは、子どもと読みあう絵本を選ぶ際にも、それぞれの子どもの思い浮かべながら、興味や関心はどこにあるのか、絵本の色、サイズ、ストーリー、音の響きなどを細やかに考えられるようになっています。文学と対話を融合したかわりを体験する時間をさらに積み重ねながら、新たな発見をした学生たちが学び成長する姿は、眩しく頼もしく感じられる1年でした。

昨年度に引き続き、2024年度よむふむ活動に用いたブックリストも作成することができました。



今後さらに子どもたちの幸せを願い、本活動を継続していきたいと考えています。

なお岡山市とドイツ・ブレーメンとのコラボ事業である『ブレーメンの音楽隊』朗読にもメンバーが参加しました。録音した朗読はブレーメンのホームページでも公開される予定です。

2024年度 <開催日>計16回

① 4月17日(水)	⑨ 10月9日(水)
② 5月15日(水)	⑩ 10月23日(水)
③ 5月29日(水)	⑪ 11月6日(水)
④ 6月12日(水)	⑫ 11月20日(水)
⑤ 6月26日(水)	⑬ 12月4日(水)
⑥ 7月10日(水)	⑭ 12月18日(水)
⑦ 7月24日(水)	⑮ 1月8日(水)
⑧ 9月26日(水)	⑯ 1月22日(水)

【総社市との包括的連携協定に基づく活動】

総社市インターンシップ参加報告

日本語日本文学科 3 年 有馬愛喜

2024 年、私は内部障害者として、総社市でのインターンシップにオンラインリモートで参加する機会を得ました。新たな挑戦であり、総社市にとっても内部障害を抱える学生がオンラインで参加する初めての試みであったと聞いています。迎えた 8 月 6 日、私は Zoom を通じて「インターンシップ開講式典」（他の本学学生 11 名は対面）に参加しました。21 日から開始するはずでしたが、持病の悪化により緊急入院を余儀なくされ、病室から LINE のビデオ通話を活用し、総社市総合政策部・魅力発信室の職員の方々と業務について意見を交わす機会をいただきました。さらに治療が必要となり、県外のかかりつけ病院へ転院し、手術・回復に専念しました。改めて 10 月 24 日から 11 月 22 日の期間、公務員の勤務時間を基準にスケジュールを調整し、木曜日と金曜日の授業の空き時間を活用しながら業務に取り組みました。

ふるさと納税に関する会議に参加し、社会貢献と生活支援を両立させる制度の在り方について学びました。また、総社市の魅力発信業務について説明を受け、市のシンボルである愛らしいマスコットキャラクター「チュッピー」に関わるイベント用の年賀状やチラシの作成方法を学びました。地域に根ざした広報活動の実践を体験する貴重な機会となりました。また、ふるさと納税の返礼品調査を進め、適切な製品の選定方法を学びながら、調査結果を Excel で整理しました。さらに、政策提言の作成にも取り組み、地域の課題を分析し、実現可能な政策案を構築するプロセスを経験しました。また、「チュッピー」の SNS 投稿のデザインや文章作成にも携わり、年賀状と SNS のデザインの異なる役割や特徴について理解を深め、効果的な情報発信の手法を学び、ターゲット層への訴求力を高める広報戦略の重要性を実感しました。

このインターンシップを通じて、政策や広報の実務的な側面を学ぶとともに、地域と行政のつながりを深く理解する貴重な機会となりました。私は先天性疾患の影響で幾度となく入院や通院を繰り返し、そのたびに日常のリズムを立て直す困難に直面してきました。しかし、逆境に屈することなく前向きに歩みを進め、インターンシップに取り組むことができました。その背景には、総社市と本学の手厚い支援体制があります。総社市は、障がい者千人雇用をはじめとする多様な支援策を推進し、障がいのある方が地域で自立できる環境づくりに尽力しています。本学もまた、内部障害を抱える学生が安心して学び続けられるよう、創設者ジュリー・ビリアートの教育理念に基づき、すべての学生に平等な学びの機会を提供しています。12 月 26 日、Zoom で参加した「インターン成果報告会」において、「チュッピー」の認知度向上を通じた総社市の魅力発信と地域活性化に関する政策提言を発表し、質疑応答に臨みました。修了証の交付をもって、数ヶ月にわたる学びの集大成となるプログラムが正式に終了しました。この経験を糧に、さらなる成長を目指し、一步ずつ未来へと歩みを進めていきたいと思いました。



図：報告会の様子

【一般社団法人日本自動車連盟（JAF）岡山支部との包括的連携協定に基づく活動】

JAF 岡山支部との連携活動（第2段階）

現代社会学科 3年 小室美涼

日本語日本文学科 3年 馬越美佳

現代社会学科 2年 瀬島沙弥

児童学科 3年 福井結衣

人間生活学科 3年 三宅心愛

2023年からJAF（日本自動車連盟）岡山支部との連携活動として、女子学生に焦点を当て、髪型からヘルメット着用促進へアプローチしたカタログの作成に取り掛かりました。

2024年の活動としては、完成したカタログを基に、清心中学校・清心女子高等学校の女子学生に向け発表を行いました。ヘルメットを着用しても崩れないヘアセット手順の説明に加え、後日ヘルメット着用率の変化を、Google フォームを通じてアンケート調査しました。そして2024年から新たに、ヘルメットと制服のおしゃれな組み合わせに焦点を当て、ヘルメットの着用促進を狙ったカタログ作成に取り掛かりました。明石ユニフォームカンパニー様ご協力の下、実際にJAF職員の方々と清心学生で様々な制服とヘルメットを着用しながら、カタログに掲載するおしゃれな組み合わせを選定しました。



また今回のカタログには、「リボンの付け外しができるヘルメット」や「流行りのバレエコアヘルメット」といったおしゃれなヘルメットのデザイン案を清心学生が考案し、加賀産業株式会社様に試作品として形にいただいたものを掲載しました。また試作品については、メディアに向けて発表も行いました。そして、美容師の方直伝の「崩れた前髪の直し方」、「崩れにくい前髪の作り方」や髪に関するQ&Aなども掲載しており、多くの方に興味を持って見ていただけて、かつヘルメット着用を促せるようなカタログとなるよう心掛けました（2025年度完成予定）。

2023年度に引き続き、2024年度もJAF職員の方々と何度も話し合いを重ねながら、カタログ作成に



取り組みました。ミーティングを通して、自身の考案力や解決力を培えるだけでなく、職員の方々と学科の異なる学生たちなど、垣根を越えた多くの方々の新しい意見に刺激を受けました。いつも親身となって私たちの意見を聞き、取り入れてくださったJAF職員の方々をはじめ、カタログ作成に協力してくださった企業の方々、このよ

うな貴重な場を設けてくださった大学の教授など、多くの方に携わっていただいていることでこの活動ができていることに感謝しながら、今後も連携活動に尽力していきたいと思います。

【赤磐市との包括的連携協定に基づく活動】

「赤磐市を舞台にした新イベント検討会：ワークショップ」参加報告

現代社会学科2年 塚本 瑚々

2024年9月から12月にかけて、赤磐市を舞台にした新イベント検討会に本学から2名（現代社会学科2名：全在学生から募集した結果）が参加しました。全4回に渡って行われたこのワークショップでは、従来のイベントを再構築し、若い世代を中心に市民や市外の人たちが積極的に参加できるイベントを創出することを目的としていました。参加者各自が持ち寄ったイベントプランを基に、グループに分かれてそのアイデアをさらに具体化していく形式で進められました。私が所属したグループでは、「冬×花火」というキーワードから、冬の花火大会を赤磐市の特産品PRと組み合わせたイベントを企画しました。曼荼羅シートを用いて、イベントの企画、広報、準備など、多岐にわたる要素を検討し、最終的にはグループごとに赤磐市職員の方々などの前でプレゼンテーションを行いました。

私がワークショップに参加しようと思ったきっかけは2つありました。まず1つ目は、このワークショップが大学生だからこそできる地域貢献だと考えたからです。若い世代の視点から新たなイベントを創出するというワークショップの趣旨に共感し、自分のアイデアが地域活性化に貢献できるのではないかと考えました。2つ目は市職員の方々と対等に意見交換ができる貴重な機会であると考えたからです。普段の大学生活では行政の方々と直接意見を交わせる機会はほとんどないですが、このワークショップでは、大学生の意見が尊重され、真摯に受け止められる場であると感じました。実際にワークショップでは、大学生である私の意見を行政の方々に聞いていただき、大学生という立場でありながら、地域の未来を担う一員として意見を述べることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じています。

今回のワークショップでは、地域活性化には多様な視点と協力が必要不可欠であることを再認識し、大学生や市職員など様々な立場の人々がそれぞれの専門知識や経験を持ち寄り、議論を重ねることにより良いアイデアが生まれることを実感しました。イベントの企画・運営には、オリジナリティだけでなく、現実的な視点も必要であることを学びました。広報、予算、安全対策など、多岐にわたる要素を考慮し、独創的かつ実現可能な計画を立てる重要性を知ることができました。また、大学生の視点が地域活性化に貢献できる可能性を強く感じました。若い世代の視点や発想力が地域に新たな活力を与えることができると感じ、積極的に参加していくことの価値を感じました。今回のワークショップで得られた学びと経験を活かし、今後もさらに地域社会へと還元していきたいと感じました。これからも地域活性化に関するプロジェクトなどに積極的に参加し、地域社会の発展に貢献できる人材を目指していきたいです。



(2) その他の連携活動に関する報告

社会福祉士課程における地域連携活動

地域連携・SDGs 推進センター主任／人間生活学科 濱崎絵梨

社会福祉士課程では、社会福祉士に必要な幅広い視野と知識、実践力を涵養するため、さまざまな地域連携活動に取り組んでいる。ここでは、フェリーチェ公開講座「誰一人取り残されない社会を目指して－孤独・孤立について考える－」にパネリストとして登壇した一連の取り組みについて報告する。

1. 目的と概要

目的は、ソーシャルワーク実習（計 240 時間）を通じて社会福祉の制度や事業を学んだ 3 年生（今年度 13 名）が、地域社会の課題を俯瞰し、制度の枠組みを超えた支援の必要性やあり方についてソーシャルワークの視点から考察するとともに、社会福祉士に必要な実践力を向上することである。今年度は「孤独・孤立」をテーマとし、「こどもや若者への取り組みから考える」を具体的な視点とした。

2. 取り組みの内容

【フィールドワーク（10～11 月）】

テーマに基づき、2 チームに分かれてフィールドワークを実施した。1 つ目のチームは、「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」を設置して対策に取り組んでいる笠岡市の「健康福祉部まると支援推進課」と「認定 NPO 法人ハーモニーネット未来」に、2 つ目のチームは、「岡山市こどもの権利に関する条例（仮称）」の制定を目指している岡山市議会「こども未来創造調査特別委員会」委員長 林敏宏議員にご協力いただいた。

【フェリーチェ講座でパネリストとして発表（12 月 8 日）】

フィールドワークを通じて得た学びや考察をスライドにまとめ、パネリストとして発表した。スライドの一部を掲載する。

笠岡市連携プラットフォーム



図 35 笠岡市連携 PF イメージ図

こどもから高齢者までが集まる居場所



取材を通して

- 課題
- ・居場所への考え方の違い
 - ・財源不足、人材不足



私たちがからできること（取材から）

大学生という立場を活かした、自由な活動



岡山市こどもの権利に関する条例とは

（目的）
児童の権利に関する条約及びこども基本法の理念に基づき、こどもの権利が社会全体で保障され、こどもが夢や希望を持ち、将来にわたって幸福な生活を送ること。

4つの基本理念



岡山市こどもの権利に関する条例（草案）
岡山市議会こども未来創造調査特別委員会（令和6年9月27日）

林議員へのインタビュー



- どういった経緯で条例を作ったか
いじめやヤングケアラーの発見と対策について
居場所と遊び場について

こどもの権利条例に関するアンケート

対象：岡山市内在住・在学・在勤の20歳以下

おとなへ伝えたいメッセージ



意見・話を聞いてほしい	363
おとなに関する感謝・激励	285
おとなに関する要望（おとな全体・政治への意見）	212

岡山市こどもの権利条例に関するアンケート結果
岡山市議会こども未来創造調査特別委員会（令和6年11月2日）

自分たちの意見

第3の居場所の必要性

家庭や学校以外の場で信頼できるおとなや友だちと、安心して過ごせる居場所

- （求める居場所）
- ・好きなこと（ゲーム、推し活、漫画）が好きなだけ出来る場所
 - ・ご飯が食べられる場所
 - ・安心してくつろげる場所

- （具体的な居場所）
- ・公民館や児童館
 - ・こども食堂やコミュニティハウス
 - ・放課後クラブや学童保育





【岡大×県大×清心女子大 大学生ソーシャルセクター活動合同発表会（2月13日）】

取り組みの成果と学びをオンラインで共有し、他大学の学生と意見交換を行うことで理解を深めた。
一連の活動を通じて、社会福祉士としての視野を広げることができた。



Ⅲ. SDGs 推進活動の一覧と報告

1. SDGs 推進活動実績一覧¹

(1) 「SDGs 理解」推進に関する活動実績一覧

1) 「SDGs 理解」に関する協議・寄稿・発表・説明・取材等

年 月 日	内 容
【継続】2023(令和5)年4月～	岡山県男女共同参画推進センター運営委員長として、センター長が委嘱。
2024(令和6)年4月1日～	岡山市男女共同参画専門委員会委員としてセンター長が委嘱。
2024(令和6)年4月～7月	全学共通科目「ディスカッションから社会を考える」枠においてセンター長が「国連 SDGs 入門」授業の実施。受講者約 100 名。
2024(令和6)年4月25日	全学共通科目「人間論」(全1年生必修)において、センター長がSDGsと本学・修道女会の実践についてゲスト講義。SDGs意識アンケート実施。
2024(令和6)年5月21日	国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 第1回カリキュラム分科会に濱西センター長が出席 (オンライン)。
2024(令和6)年6月3日	ウェブマガジン「LIVIKA」の「清心コラボ」取材に、センター長が対応。記事掲載。
2024(令和6)年6月6日	岡山市男女共同参画推進センター運営委員会にセンター長が、委員長として出席。
2024(令和6)年7月4日	岡山市主催「学生のためのキャリア形成支援講座」を本学にて実施。センター長がコーディネーターを務める。
2024(令和6)年7月20日、8月3日	清心フェリーチェ講座の「防災／SDGs 講座」として「地域防災を支える人材育成プログラム」を実施。【資料編に掲載】
2024(令和6)年7月30日	国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 第2回カリキュラム分科会にセンター長が幹事として出席 (オンライン)。
2024(令和6)年8月21日～24日	国連大学グローバルセミナーに学生2名を派遣。【詳細は活動報告に掲載】
2024(令和6)年10月1日	「国連 SDGs 入門」の修了証授与式を本学にて実施。
2024(令和6)年10月15日	国連大学学長の来学・学生懇談に向けて学生有志6名とセンター長がランチミーティング。内訳: 院生2名(社1名・英1名)、学生4名(英文)
2024(令和6)年10月18日	本学 OC の池田和子さんと Robin Hattori さんによる学長表敬、及び戦中の日系人抑留経験・全米日系人博物館に関する SDGs 講演を実施。
2024(令和6)年10月22日	国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 第4回セッションにセンター長が出席 (オンライン)。
2024(令和6)年10月29日	国連大学マルワラ学長、山口サステナビリティ高等研究所長等が本学学長表敬訪問。学生・院生有志と懇談実施。【詳細は活動報告に掲載】

¹ 「地域連携」の実績としてすでに報告されているものは除いている。

2024(令和6)年11月15日	岡山市基本政策審議会委員としてセンター長が委嘱。
2024(令和6)年12月7日	清心フェリーチェ講座の「SDGs 講座」として「誰一人取り残されない社会を目指して—孤独・孤立について考える—」を実施。【資料編に掲載】
2024(令和6)年12月14日	オープンキャンパスにおいて、センター長が清心コラボについて説明。その後、JAF 岡山連携と天満屋連携について学生が活動報告を実施。
2024(令和6)年12月23日	第1回岡山市基本政策審議会に、センター長が委員として出席。
2025(令和7)年1月16日	国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 第5回セッションにセンター長が出席 (オンライン)。
2025(令和7)年3月12日	岡山県男女共同参画推進センター運営委員会にセンター長が、委員長として出席。
2025(令和7)年3月17日	第2回岡山市基本政策審議会に、センター長が委員として出席。
2025(令和7)年3月27日	国連大学 SDG 大学連携プラットフォームの公開セッションにセンター長が出席。SDGs カリキュラム分科会幹事として登壇。

(2) SDGs の達成に関する活動実績一覧

1) SDGs の達成に関する活動

年 月 日	内 容
2024(令和6)年4月8日、19日、5月15日	盗撮防止スカートについて企業・センター長が、学生交えて協議。盗撮経験についてセンター長が在学生アンケート実施／山陽新聞に掲載。
2024(令和6)年4月30日	岡山市消防局担当がセンター長訪問。消防団機能別学生団員の取り組み、ジェンダー関連の倫理規定関連についてアドバイス等を実施。
2024(令和6)年6月15日	女子サッカーチーム岡山湯郷 Belle との連携活動として、シティライトスタジアムでの試合に学生30名が運営ボランティアとして参加。また100名近くが無料招待で観戦を実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024(令和6)年7月20日、8月3日	岡山市消防団機能別学生団員18人、消防団副団長等が清心フェリーチェ講座(防災講座)を受講。
2024(令和6)年7月～	NPO 法人消費者ネットおかやまと本学学生の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】
2024(令和6)年11月～	株式会社ちゅうぎんフィナンシャルグループと本学学生の連携活動の実施。【詳細は活動報告に掲載】

2) SDGs 推進機会の在学生への提供

年 月 日	内 容
2024(令和6)年4月19日	岡山湯郷 Belle のボランティア・試合観戦に関する事前告知
2024(令和6)年4月29日、5月10日、5月11日、5月13日、5月17日、6月4日、6月11日	岡山湯郷 Belle の試合について、ボランティア・試合観戦をNサポで募集。

2024(令和6)年5月13日	岡山市主催「さんかくウィーク 2024」について、Nサポで学生に案内。
2024(令和6)年6月22日	NPO 法人消費者ネットおかやまとの連携活動について、Nサポで参加者募集。
2024(令和6)年7月4日	本学清心フェリーチェ講座の開講情報について、Nサポで学生に案内。
2024(令和6)年7月18日	第40回国連大学グローバル・セミナーについて、Nサポで参加者募集。
2024(令和6)年9月18日	岡山市「さんかくウィーク」実行委員の募集について、Nサポで学生に案内。
2024(令和6)年10月25日、11月1日	ちゅうぎんフィナンシャルグループとの連携活動について参加者募集。
2024(令和6)年11月28日	本学清心フェリーチェ講座 SDGs 講座について、Nサポで学生に案内。
2025(令和7)年1月14日	令和6年度岡山市市民活動リーダー養成講座「若者の地域活動体験～生活困窮家庭の子どもたちに誕生日プレゼントとして届ける本を選ぼう～」について、Nサポで学生に案内。
2025(令和7)年1月24日	「おかやま SDGs ユースの集い 2025 SDGs クエスト～持続可能な未来を拓く私たち～」について、Nサポで学生に案内。
2025(令和7)年1月24日	京山 SDGs フェスについて、Nサポで学生に案内。
2025(令和7)年1月24日	ももたろう基金 活動報告シンポジウムについて、Nサポで学生に案内。
2025(令和7)年2月27日	WePRO フォーラム「女性を選び、戻りたくなるまち・岡山に～キャリアもライフも楽しみたい～」について、Nサポで学生に案内。
2025(令和7)年3月7日	「雪恋まつり外出支援プロジェクト」報告会について、Nサポで学生に案内。

2. SDGs 推進活動報告（一部）

（1）「SDGs 理解」推進に関する活動

国際連合関連 UNU グローバルセミナーを終えて

文学部 英語英文学科 3年 吉野 優

プログラム

Day1: 8月21日（水）

- ・ 講義1「金沢の生物文化多様性と持続可能な都市自然について」

Day2: 8月22日（木）

- ・ 講義2「能登の状況と能登らしさを活かした創造的復興について」
- ・ 講義3「防災・減災とESD」
- ・ 講義4（勝間靖 国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) アカデミック・アドバイザー）

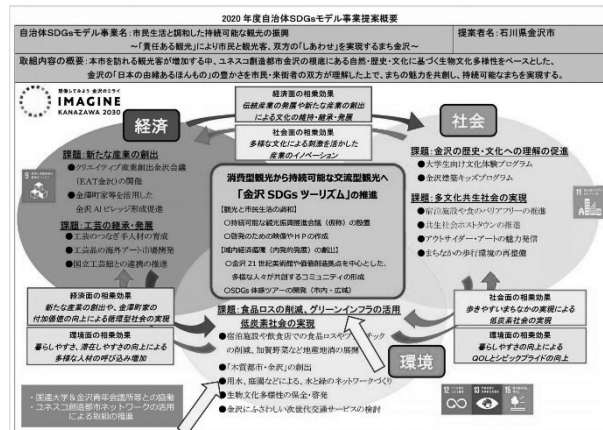
Day3: 8月23日（金）場

- ・ 講義5: 生態系保護に対する国際的な枠組み・課題について
- ・ 講義6: ジオパークとエコパークの特徴と活動について
- ・ 講義7: ジオパーク・エコパークを活用したESDの推進について
- ・ グループディスカッション&プレゼンテーション

今回のグローバルセミナーは、コロナが終息してから初めての対面で、石川県での実施でした。持続可能な地域と社会へ向けて一能登、金沢、白山から学ぶレジリエンスとイノベーションをテーマにプログラムが組まれていました。最初の2日間は、金沢での講義を受け、金沢でどのように人の生活と生物が共生していて、なぜ能登が GIAHS/globally important agricultural heritage systems に登録されているのかなど深く広く学ぶことができました。実際に能登での被害にあわれた方の現在の状況や被災地の写真などを見せてもらい、この現場から学べる事、そして学んだことを次回にどう生かすかについて詳しく講義を受けることができました。

3日目から最終日は、白山へ足を運び、自然と人と生物の関わりについての講義を受け、理解を深めていきました。その中でも、私が最も興味深く感じた内容は、生物文化多様性についてです。現代では、二酸化炭素の排出やオゾン層の破壊などの環境汚染が問題として挙げられています。環境を汚染しようと意図していなくても、私たち人間の生活により生物たちの生息地は狭められています。様々な生物が川、湖、海などの様々な場所で生活しています。人々はその中でそれぞれの生態系に支えられ、文化や習慣を発達させてきました。例えば、人々が田んぼや水田を耕すと、その中でお玉杓子が生まれ、タニシが卵を産みます。このように、人々が発達させてきた場所が生物の生殖地になることが生物文化多様性につながっていくのです。金沢は、下の画像の通り、SDGs を可能にするサイクルを完成させ

ているという点で、高い評価を受けている場所です。



私たちは、このようになぜ金沢や能登が注目されているのか、どう言う環境なのかとすることをしっかり理解した上で、実際にその場所で生活をし、観察をし、それぞれの考えを発達させていきました。また、私が今後広げていきたいと思った活動が urban nature というものです。



写真の通り、高層ビルや建物の屋上に木を植え、緑を増やし、生物の生息地を人工的に増やしていこうという活動です。例えば、東京の渋谷や新宿などの都市部にも大きな公園があります。もちろん、人の娯楽の場所としても機能していますが、立派な環境保護の一環にもなっています。

最終日には、それぞれプレゼンをまとめて、発表しました。今回だけではなく、普段から自分の周りの環境や社会に意識を持ち、積極的に学ぶ姿勢を忘れずに精進していこうと改めて思いました。

国際連合関連：UNU グローバルセミナー体験談

英語英文学科 3 年 難波 優希菜

8 月 21 ～ 24 日の 4 日間にわたり石川県で開催された第 40 回国連グローバルセミナーに参加しました。今回は、「持続可能な地球と社会に向けて」というテーマのもと能登、金沢、白山市から震災復興、防災、保全再生などについての理解を深め議論しました。

【日程】

1 日目： Juan pastor-lvars 博士、及川幸彦教授による基調講演、フィールドワーク（玉泉院丸庭園でお抹茶体験、兼六園）

2 日目：小山明子さん、及川幸彦教授による基調講演、白山市に移動、勝間靖教授による基調講演

3 日目：渡辺綱男氏による基調講演、メイ・スーザンさんからのジオパークとエコパークの特徴と活動についてのプレゼンテーション、マントヴァ・アイダ教授の基調講演、グループワーク、グループプレゼンテーション

4 日目：白峰、白山国立公園散策・体験

フィールドワークの様子

リノベーションされた空き家



1 日目、2 日目の基調講演では、主に能登半島地震から創造的復興、防災、都市自然の保全再生、持続可能な活用に関する取り組みを中心に学びました。3 日目は、生態系の保全と地域の取り組みについて白山ユネスコパークや白山手取川ユネスコジオパークの活動に関する講演から学びました。そして、午後からはプレゼンテーションに向けてグループに分かれてテーマについて課題や解決策など話あったりプレゼンテーション用のスライドを作る作業をしました。私達のグループでは、「持続可能な開発のための教育」をテーマに議論を進めプレゼンテーションを行いました。白山市に住む大学生を対象者とし、彼らの将来へのキャリア、持続可能な教育、大学の設備、自然災害後の適切な行動など、これらの点を考慮し議論を進めました。解決策として、大学のような生徒に学べる場の提供することが重要だと考えました。そこで、グローバルセミナーのように他大学や異なった専門分野をもつ人たちが白山市に集まり白山市の災害の歴史や自然災害が実際に起こった時の対応について過去の出来事か

ら学び、地元の学生と意見を共有する時間を提供することが大切なのではないかと考えました。さらに、近年増加傾向にある観光客により観光公害に苦しんでいるため、ツーリズムマネジメントの教育、加えて新しい文化に適応するためにイベントを開催するなどテーマに関する案が様々でした。

4日間自然に溶け込んで生活することで気づいた問題、課題などその課題に対して石川県が行なっていることなど知ることができました。白峰市では、高齢化や少子化が進み、年々増える観光客と減り続ける人口の数が比例しておらず、街づくりを支える人材の世代交代の不足している状態に直面しています。そこで、地域文化を守るため白峰市では、地域文化保全事業に取り組んでいます。古民家を最大限利用するために、適応型再利用のような手法を使い古民家を改修し、ホテルやレストラン、飲食店などにリノベーションする取り組みがなされています。建物の外観は、歴史を感じさせてくれる和風のデザインで、内部は現代風のデザインが施されていました。私自身、町おこしに興味があり、約一年くらい地方創生プロジェクトに携わっているので、白峰市が行っている活動が印象に残りました。私の地元の岡山でも空き家の数が年々増えているので、白峰市で学んだことを地元のプロジェクトに活かしたいと考えています。

2024 Japan University English Model United Nations at Notre Dame Seishin University

Thomas Fast

Department of English Language and Literature

Keywords: Internationalization, global competencies development, student involvement

Introduction

The Model United Nations (MUN) is a gathering of students, who roleplay UN delegates, and share opinions on a designated global issue, often linked to the United Nations Sustainable Development Goals (SDGs). The Japan University English Model United Nations (JUEMUN) conference was first held at Notre Dame Seishin University in 2022. 2024 JUEMUN was held at NDSU from June 28th to 30th, along with



important side events as part of the conference. JUEMUN 2024 was a UNESCO General Assembly on Education for Sustainable Development (ESD). The conference was divided into three Rooms: Green Education, Peace Education, and Education for Science, Technology, Engineering and Math (STEM).

Japanese and international students from 10 universities attended, including three from overseas: MacEwan College of Alberta, Canada, Ukrainian Catholic University, and a German delegation from North Rhine Westphalia. All together 163 student participants from the following 16 different nations (about 27% international delegates overall) took part:

Japan
China
Sweden
S. Korea
Poland
Thailand

Hong Kong
Germany
Republic of Congo
Canada
Ukraine
Philippines

Myanmar
Indonesia
Peru
Singapore

JUEMUN 2024 achieved several firsts including: The attendance of the Mayor and members of Okayama City Hall, hosting students from overseas with Seishin families, Culture Tours organized by English Department students in Dr. Fast's seminar, and more.

Host Families and Culture Tours

Tuesday, June 25th, the Canadian and Ukrainian students arrived in Okayama and began their weeklong homestays with the families of NDSU students, mostly from the English Department. On Wednesday June, 26th and Thursday June 27th, the Ukrainian and Canadian delegates and their faculty members were divided into groups and taken on Culture Tours to Hiroshima and Kurashiki by Dr. Fast's seminar students.



On the Hiroshima Tour, students first visited Miyajima before going to the Peace Park. Visiting both sites was all the more meaningful given the presence of the Ukrainians, so relaxed, happy and “at peace” at the Itsukushima Shrine World Heritage site, and then brought back to reality when they saw the images of nuclear destruction at the Peace Museum. One of the students compared the photos at the museum with those of the destroyed shopping mall just across the street from her family home, which had on her phone. Meanwhile at Kurashiki, students had the opportunity to stroll the Bikan District, visit local shops and museums, and experience traditional culture like taking a canal ride and wearing yukata. Both trips were very well-organized by the student guides and went smoothly.

JUEMUN 2024 was the perfect opportunity for local families to take part in a weeklong experience hosting students from Germany, Canada and the Ukraine. The results were beyond our expectations. The following quote from an NDSU student who hosted a Ukrainian reveals the deep impact the experience had for her:

Honestly, I felt like the war in Ukraine was another people's affair because it happened in an extremely remote country...However, the situation changed...I have friends in Ukraine ...From this experience I consider interaction with people from different countries can create thoughtfulness and peace.

The hosting and culture tour experiences were extremely meaningful for the NDSU students. It was a way for them to reflect on cultural issues and their own values and beliefs about themselves and others. Professor Protsyk of the Ukrainian Catholic University, thanked the NDSU students and organizers for giving her students “a week of peace.” There were many tears as they boarded the bus for Okayama Airport.

JUEMUN 2024

The conference began with an Opening Ceremony featuring speeches from President Sister Aoi Tsuda, Okayama City Mayor Masao Omori, Keynote Speaker Dr. Halyna Protsyk, Dr. Fast and the Secretary Generals. Then the sessions began. Over the next three days, delegates engaged in the Model UN process. All together, the delegates passed 12 resolutions, which have been uploaded to <https://juemun.org/archives/juemun-2024/>. Copies of the resolutions were also sent to the Okayama City Department of Education for Sustainable Development (ESD).

Germans Visit City Hall

Another feature of the JUEMUN 2024 Conference was the deepening of our relationship with the German Delegation. At City Hall, the students met Met Vice Mayor Takenaka Masahiro and his staff, along with members of the Departments of International Affairs and Education for Sustainable Development. Vice Mayor



Takenaka gave an impressive welcome speech in German, followed by presentations about Okayama and its international relations, as well as its activities related to ESD and the SDGs. The German students then presented on the City of Cologne and their university programs, in which they are currently training to be public servants. In the end, it was a very successful meeting. It was followed up by a similar visit by Dr. Fast and his seminar students to Cologne in September. The Germany exchange is another example of how the MUN can have a ripple effect and lead to additional international education opportunities and relationships that extend beyond the three day conference.

Delegates' Reflections on JUEMUN

The NDSU delegates were given a survey after the conference. All respondents (n=13/16) reported either having a good or excellent experience. Feelings of accomplishment, increased English skills, and making new friends, were noted in the delegates' comments. In fact all respondents (except those graduating), said they would like to participate in a future MUN conference. Perhaps the best way to capture the students' impressions of the JUEMUN experience is through the words of the participants. Below are quotations by students serving in various positions in the conference:

What I learned from JUEMUN is that I can speak English more than I thought. JUEMUN was my first experience of being in a place where everyone spoke in English. Before JUEMUN, I had no confidence in my speaking skill at all. Now my motivation to study English is to be like other skillful delegates...JUEMUN is a fun event...We need to spread this great experience to other future delegates.

(1st Time Delegate)

I enjoyed interacting with many students and helped a lot of students who joined for the first time. From these experiences, helping people enables me to not only encourage them but also improve myself. I am not afraid of doing challenges whatever I want to, which leads to discovering new possibilities...

(Experienced Delegate)

Through this JUEMUN, I learned a lot about the topic and myself...I jumped into the field of peace studies...It has greatly helped to reflect the current and past wars and also how they have been taught, particularly in Japan. In regard to chairing...I actually realized that I became a Senpai...I was relied on by Kohais, which actually makes me feel my self-growth...

In retrospect, my entire MUN experience has been the center of my school life. Through the MUN, I was able to broaden my own perspectives, have better communication, and build nice relationships with my classmates, as well as improve my English comprehension. I think my MUN experience has become one of the most important parts of my life.

(Chair)

Regarding the conference content, all respondents felt they gained significant knowledge of the issues discussed, as can be seen from the survey comments below:

Children in Angola have to fetch water to serve their family and their livestock instead of going to schools. They tend to drop out...I tried to think of solutions for not only developed countries but also developing countries, getting ideas from other delegates helped me raise my awareness and find out a lot of interesting strategies..

I learned about my country, Vietnam. There are a lot of good things for green education in Vietnam, more than I expected. I wanted to connect with art works and education. Because I believe that art is one of the significant educational tools for especially young generations. According to UNESCO, "Arts education also has deep, long-term benefits for learners. It helps to meet the diverse learning needs of children, paves the way for life-long learning and fosters cultural diversity, which include advanced learning outcomes and the acquisition of new skills, benefiting learners of all ages." I was impressed with that and I researched a lot with my interest. I can use that if I become a teacher.

I learned that teaching or leading others were very hard, and sometimes I felt irritated or frustrated. Through preparation and the conference. I could understand how hard it was to take responsibility.

Conclusion

From the reflections above we can see how the JUEMUN experience impacts participants. First time delegates often notice their English improvement, and perhaps gain a little confidence. Experienced delegates collaborate better with international delegates, and help those with less experience. Chairs become leaders and understand the range of ways that MUN has impacted them. We can see from the students' own words the direct value that the Model UN has had in developing their English communication, thinking skills, knowledge of local and global issues, confidence, leadership ability, and more. The additional experiences of the home stays, the attendance by Mayor at the conference, and the German delegation's visit to City Hall are further evidence of the positive impacts that JUEMUN 2024 had beyond the conference, in providing international experiences for the volunteers and local families, connections with the city and further opportunities for international exchange.

The JUEMUN 2024 organizers would like to thank all those many people who contributed, particularly student leaders, but also the NDSU faculty and administrators, volunteers, host families, partner universities, and everyone who made the conference a success. We ask for your continued support in sustaining the valuable resource that is the Model United Nations at Notre Dame Seishin University for generations to come.

国連大学学長との学生懇談の報告

文学研究科社会文化学専攻2年 横山 浩花

2024年10月29日、国連大学のチリツィ・マルワラ学長が本学を訪問されました。学長表敬に先立ち、英語英文学科に所属し、模擬国連での活動経験がある5名の学生たちと共に、何度も事前の打ち合わせを重ね、自らの経験や体験をもとに、私たちの伝えたい想いについて話し合いました。

ここでは、懇談で取り上げたトピックの一つを紹介します。それは、参加した学生の共通点であった「地方の女子大に通う学生」としての意見です。具体的には、地方都市に住む女子学生が、家庭内や学校、就職先など社会の中で、「ジェンダー」「地方」「若者（ユース）」という三重の枠組みによって不平等な立場に置かれやすいということについて、都市部と地方の大学進学率や雇用状況のデータなどを用いて、ジェンダー視点から説明しました。

さらに、地方における女子学生の現状を踏まえ、地方の女子大学が地方における女性のエンパワーメントの促進を担っていることに触れ、日本全体だけでなく地方のジェンダー課題に目を向け、加えてユースというマイノリティの視点も取り入れることで、日本におけるSDGs目標5の達成を加速させることを主張しました。そこで、国内外に多くのネットワークを持つ国連大学との連携プログラムを提案し、住む場所や性別、年齢などにかかわらず、全ての人が同様の学びや人々との出会いの機会を得ることを求めました。

これらを踏まえ、チリツィ・マルワラ学長からは、社会課題の本質を見定めるためにはデータだけでなく、そこに至る歴史や過程を学ぶことの重要性についてご助言をいただきました。また、地方における女性のロールモデルについて、“Be an ambassador in your age”（「あなたたちも、同年代のユースにとってのロールモデルになれる」）という私たちの学内外での活動を評価し、力強い励ましの言葉をいただきました。

今回、地方の女子大生という当事者の一人として、国際的に影響力の持つ方々に対して、日本における地方都市の現状や当事者の声を届けることができ、貴重な経験となりました。これからも自分や大切な人の人権や尊厳がきちんと尊重される社会の実現のために、声をあげ続けていきたいと思います。そのためには、属性や立場にかかわらず、様々なステークホルダーと手を取り合いながら、日本のジェンダー平等を私たちの手で確かなものにしていきたいと考えています。



図 懇談の様子

(2) SDGs の達成に関する活動

【清心コラボ】岡山湯郷 Belle ボランティアに参加して

現代社会学科 2 年 辻川 周

2024 年 6 月 15 日にシティスタジアムで行われた湯郷ベルのボランティアに参加しました。「県民応援デー」ということでたくさんの方が来場していました。私は、サッカー観戦自体が初めてでどのような試合を見ることができるのだろうと楽しみでした。

今年は 8 学科の 1 ～ 3 年生 60 名がボランティアに参加し、また 100 名近くが招待観戦をしました。

ボランティア学生たちは、岡山湯郷 Belle のユニフォームを着用して、各選手の背番号と顔写真ののぼりの準備や会場設営などを担当しました。このような準備をするのが初めてだったのでとても新鮮でした。シティスタジアムの近くでは、お店やマスコットキャラクターがいるなど会場全体が盛り上がっていました。また、選手の趣味や好きなことが書かれているポップがあり、湯郷 Belle を知るきっかけとなる工夫がたくさんされていました。ポップと一緒に写真を撮られている方もたくさんいました。私は、入場口のハリセン配りを担当しました。来場される方の年齢層はとても幅広く、スポーツ観戦に年齢は関係ないとはこういうことなのだと実感しました。観戦中も湯郷ベルが勝つことと同じ目標に向かって応援していたため、一体感が有り楽しかったです。試合は 5 対 1 で勝利しました。試合終了後の選手の皆さん、そして観戦していた人たちの笑顔がとても素敵で印象的でした。

今回のボランティアを得て、湯郷 Belle への関心が高まるとともに、女子サッカーの面白さを知ることができました。本校の女子大学という強みを生かした今回の活動は、非常に有意義なものでした。準備のときに着用していたユニフォームをいただきました。そのユニフォームを見るたびに試合のときの興奮を思い出します。今後もこのような活動があるのなら、積極的に参加したいと思います。



図 ボランティア活動の様子

【清心コラボ】「消費者ネットおかやま」との連携活動報告書

現代社会学科 2 年 吉田咲彩

NPO 法人「消費者ネットおかやま」とノートルダム清心女子大学の5人の学生(現代社会学科4年、同2年2名、人間生活学科1年、児童学科1年)が連携し、7月から1月の7カ月間活動しました。消費者ネットおかやまさんは適格消費者団体であり、消費者被害の未然防止や消費者の権利と自立支援を目的とした組織で消費者を騙す意図がみられる怪しいネット広告に対して広告の修正を依頼したり、国の資格を得ており消費者に代わって裁判を起こす権限を持った団体です。今回は私生活のなかで問題がある怪しいネット広告をインターネット上で探し、消費者に注意喚起をするためにはどうすればよいのか私たち学生の意見を取り入れ協力するために消費者ネットおかやまさんと私たち学生が連携いたしました。

私たちは7月に開かれた第1回ミーティングで消費者ネットおかやまさんから、詳細を読みにくくした広告などの消費者に誤解を与えやすく問題がある広告はどのようなものがあるのか具体例を教わりました。そして教わったことを参考に夏季休暇にかけて広告パトロールを行い、私生活で何気なくみる SNS において問題があると考えられる広告を見かけると、スクリーンショットや広告から飛べるサイトの URL をコピーし怪しいと感じた広告を集めました。そして、第2回ミーティングで私たち学生が私生活で見かけた問題がある広告について、一体どのような箇所に問題があると感じたのか報告し合いました。

私たちは消費者が「この広告はおかしい」と気づき、騙されたり泣き寝入りしてしまう消費者を少しでも減らすためにはどのような活動をすればよいのか議論しました。その結果、幼い頃から問題がある広告の実態について知ることが重要であるという結論となり、遊びを通して学べるカルタを制作することになりました。そして、学生でカルタ案を持ち寄り、カルタの計画は来年度に継続して行うことになりました。

私は今回の連携を通して、問題がある広告は身近にあふれており、消費者被害と戦ってくれる方々と実際に話し合ったことで泣き寝入りをする必要などなく、消費者団体に被害を伝えることで事態は好転することを学びました。児童向けのカルタの制作や実施が来年度継続となったことに対し、私は来年度もつづけて活動に参加し、消費者被害の未然防止のためにどうすればいいのか考えていきたいと思っています。



図 2 学生が考えた消費者注意喚起用の児童向けカルタの案

【清心コラボ】中国銀行との意見交換会活動を終えて

人間生活学科 3年 1名（リーダー）

英語英文学科 3年 2名

現代社会学科 3年 2名

2023年11月26日、私たちは中国銀行のD&I NEXT10推進部の方々と意見交換会に参加しました。この活動は、岡山県内企業に対する女子大学生のニーズやイメージについて話し合い、地元での就職促進に向けた視点を共有することを目的に行われました。なお率直な意見交換会にするため、大学・中国銀行合意のもと、匿名での参加が許可されましたので、この報告文章も匿名で記させていただきます。

意見交換会に向けて、私は「女子大学生が企業にどういうことを求めているのか」というテーマに基づき、それぞれの考えをスライド1枚にまとめました。スライド作成では、チーム全体で話し合いながら内容やデザインの一貫性を大切に、統一感のある資料作りを心掛けました。また、プレゼンテーションの準備を進める中で、女子大学生が企業に求めるものや、岡山県内企業のイメージについて意見を交わし、自分自身の考えを深めることができました。当日は、自分の意見をプレゼンテーション形式で発表し、中国銀行の方々からフィードバックをいただきました。企業の方と直接意見を交わす機会はとても貴重で、学生側の視点と企業側の視点との違いを実感しました。

この活動を通じて私が特に印象深く感じたのは、若年女性のニーズと地元企業の間にズレが生じている点です。私は県外での就職を希望していますが、インターンシップを通じて岡山の企業と県外の企業の違いを肌で感じてきました。本学は、岡山県内での就職を選ぶ学生が7割を超える中で、「岡山県内でいいから」ではなく「岡山県がいいから」と選ぶ学生が増えることを目指す必要性を強く感じました。また、地域の課題に対する学生の声の重要性を再確認しました。今後の具体的な関わり方は未定ですが、この意見交換会をきっかけに、中国銀行の方々や岡山の企業にとっても新たな気づきとなり、地域全体の活性化につながる一步となることを願っています。



▶グループ発表で使用したスライド

IV. 資料編

1. 地域連携・SDGs 推進活動に関する新聞記事・雑誌記事

※本報告書にすでに掲載済のものは除く



ヘルメットでも「かわいい」

ノートルダム清心女子大岡山市の学生と日本自動車連盟（JAF）岡山支部（岡）が考案した「ヘルメットをかぶってもかわいい」ヘアセット法を紹介するカタログと動画が完成した。カタログは岡支部が講習会で配り、動画は岡支部のホームページ（HP）から視聴できる。

清心女子大生と JAF 岡山支部

髪型は長さショート、ミディアム、ロングと整える時間（5分、10分、別の計6パターン）。いずれもヘルメットをかぶっても前髪に、簡単なところから、結目の上髪を分けて作った穴に、毛束を結び目と入れ込む「くるり入髪」という手法を取り入れた。

『山陽新聞』2024年4月14日

ヘアセット法紹介 カタログ、動画制作

カタログは学生がモデルとなり、各パターンの完成形と4段階の手順写真を使って説明。「ヘルメットを脱いでもかわいい」ヘアセット法を紹介するカタログと動画が完成した。カタログは岡支部が講習会で配り、動画は岡支部のホームページ（HP）から視聴できる。

ヘアセット法紹介 カタログ、動画制作

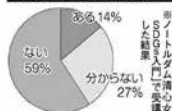
カタログは学生がモデルとなり、各パターンの完成形と4段階の手順写真を使って説明。「ヘルメットを脱いでもかわいい」ヘアセット法を紹介するカタログと動画が完成した。カタログは岡支部が講習会で配り、動画は岡支部のホームページ（HP）から視聴できる。



動画

7人に1人「盗撮された」

盗撮されたことがありますか？



主な被害状況・場所

- ・高校時代、制服着用時
- ・コンビニ、商業施設
- ・階段を上がっているとき
- ・列車内

7人に1人が盗撮被害に遭ったと認識している。ノートルダム清心女子大（岡山市北区伊福町）の授業の一環でアンケートが行われ、こんな結果が出た。自由記述からは「高校のころ、制服着用時」「友人に指摘されて分かった」など具体的な被害状況が浮かび上がる。担当する濱西栄司教授は「学生を守る観点からも防止策を考えていきたい」と話していた。（斎藤章一朗）

安全な対処法求める声も

岡山県内の企業から盗撮防止に関する商品の相談が同大4月に実施した「アスカ（国連SDG）の授

岡山県内の企業から盗撮防止に関する商品の相談が同大4月に実施した「アスカ（国連SDG）の授

岡山県内の企業から盗撮防止に関する商品の相談が同大4月に実施した「アスカ（国連SDG）の授

清心女子大生アンケート

『山陽新聞』2024年5月15日

用水路転落 高齢者52%

岡山市内で2017～21年の5年間に発生した用水路への転落事故のうち、半数超の52.3%を65歳以上の高齢者が占め、事故に伴う死亡率が成人（18歳以上65歳未満）のおよそ4.5倍に上ることが、森泰三ノートルダム清心女子大教授（人文地理学）らのグループの分析で分



森泰三教授

かった。発生時間帯別でみると「午後6時台」、移動手段は「歩行中」とみられる事故が最も多かった。

岡山市は用水路の総延長が約4千メートル、1平方メートルの水

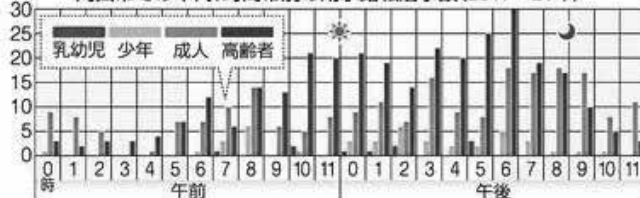


用水路転落事故の発生場所や通報日時などを盛り込んだデジタル地図

は市の補助を受けて調査・分析した上で発生場所や通報日時、年齢、けがの程度などを盛り込んだデジタル地図を作成、公開し、警戒を呼びかけている。
市消防局が救急搬送した事故599件を分析した。高齢者は313件で最も多く、成人は299件、少年（7歳以上18歳未満）42件、乳幼児（7歳未満）10件、の順だった。死亡事故は28件で、内訳は高齢者24件、成人4件、重症（57件）と中等症（161件）も高齢者が半数以上を占めた。
時間帯別でみると、いずれも午後の6時台53件▽3時台41件▽7時台39件▽5時台、8時台各38件と薄暮時間帯を中心に多発していた。転落者の年代と時間帯の関係では、高齢者の6時台（30件）と5時台（25件）が目立った。
転落時の移動手段は自動車、自転車などを除く徒歩とみられる事

清心女子大教授ら分析「午後6時台」「歩行中」最多 死亡率は成人の4.5倍

(人) 岡山市での年代、時間帯別の用水路転落事故(2017～21年)



故が283件、自転車148件などだった。
グループは発生場所が明確な図上のタグを「死」「中等症」など転落者の容体別に色分けし、開くと情報が表示される。タグを年代、時間帯で色分けした地図も示している。

さんデジで現地ルポ

用水路転落事故のデジタル地図について、山陽新聞デジタル(さんデジ)の「デジタルポ」おかやま」で、記者が現地を歩いて実態を探りました。



森教授によると、細い道や緩やかなカーブでの発生が多かったほか、ガードレールがある場所でも転落しているケースが少なくなくなったという「危機感を持つことが大切。自宅や学校、勤務先の近くで危険な場所を確認するツールとして地図を利用してほしい」としている。
(水鏡佑希)

『山陽新聞』2024年6月18日



岡山湯郷ベルのホームゲームで、のほり旗の準備をするノートルダム清心の女子サッカー部員たち。岡山市のシティライトスタジアム

女子サッカー盛り上げたい

会場準備や案内

ホームゲームで年一回

15日のシティライトスタジアム（岡山市北区伊福町）の学生が年に1度、岡山市で行われる岡山湯郷ベルのホームゲームでボランティアをして、学生たちは青いベルのユニホーム姿で集合した。公募に手を上げた193年がグループごとに、スポンサーの看板を並べたり、選手の写真を掲げ上げ、頂点へ。」と書かれたのは、昨年1学年約20人がボランティアや飲食販売などを行った。今年は全8学科から参加の声が上がった。規模を拡大した。学生が女子サッカーの魅力を伝えることにも結びついている。観戦だけの学生も90人おり、ボランティアと合わせて計150人がスタジアムに訪れた。当日入場者数1588人の約1割だ。初観戦がほとんどで、同年代の選手の活躍を見て「また来たい」と思う学生もいたようだ。

「女子サッカーの面白さを知り、ボランティアで何かをしてみたい。」と過半数は「なりたい」に選ばれた。岡山湯郷ベル事業部パートナー・セルズの内藤哲也さん（88）。同地域連携・SDGs推進センター長の濱西宗司教授は、実際に経験して学ぶ重要性に触れ「チームへの愛着も生まれ、学年や学科を超えた交流になる。学生目線で盛り上げ方を考えることもできるのでは」と期待している。

15日のシティライトスタジアム（岡山市北区伊福町）の学生が年に1度、岡山市で行われる岡山湯郷ベルのホームゲームでボランティアをして、学生たちは青いベルのユニフォーム姿で集合した。公募に手を上げた193年がグループごとに、スポンサーの看板を並べたり、選手の写真を掲げ上げ、頂点へ。」と書かれたのは、昨年1学年約20人がボランティアや飲食販売などを行った。今年は全8学科から参加の声が上がった。規模を拡大した。学生が女子サッカーの魅力を伝えることにも結びついている。観戦だけの学生も90人おり、ボランティアと合わせて計150人がスタジアムに訪れた。当日入場者数1588人の約1割だ。初観戦がほとんどで、同年代の選手の活躍を見て「また来たい」と思う学生もいたようだ。

清心女子大生

湯郷ベル戦で奉仕活動

岡山（岡山市北区伊福町）の学生が年に1度、岡山市で行われる岡山湯郷ベルのホームゲームでボランティアをして、学生たちは青いベルのユニフォーム姿で集合した。公募に手を上げた193年がグループごとに、スポンサーの看板を並べたり、選手の写真を掲げ上げ、頂点へ。」と書かれたのは、昨年1学年約20人がボランティアや飲食販売などを行った。今年は全8学科から参加の声が上がった。規模を拡大した。学生が女子サッカーの魅力を伝えることにも結びついている。観戦だけの学生も90人おり、ボランティアと合わせて計150人がスタジアムに訪れた。当日入場者数1588人の約1割だ。初観戦がほとんどで、同年代の選手の活躍を見て「また来たい」と思う学生もいたようだ。

『山陽新聞』 2024 年 6 月 21 日

哲学や地域防災 来月から講座

清心女子大

ノートルダム清心女子大

子大（岡山市北区伊福町）は7月から同大で生涯学習講座と公開講座を開く。

生涯学習講座は「生と死の哲学―生きる意

月から12月の毎月第1木曜計3回）の二つのテーマで、同大教授が話す。1回につき受講料500円。

公開講座は、国際医療ボランティアAMDAの難波妙副理事長（7月20日）と、倉敷市社会福祉協議会の椿原恵さん（8月3日）が話す地域防災を支える人材育成プログラムを実施。専門家3人がインクルーシブ教育の事例などを紹介する講義（10月から3回）と、講演や実践報告、パネルディスカッションを通じて、孤立させない社会づくりを考える講座（12月7日）も開講する。

申し込みは同大ホームページから。問い合わせは生涯学習センタ作・井上洋治・渡辺和子と聖書を学ぶ」（107045）。

味を見つめて」（7月13、27日）と「遠藤周作・井上洋治・渡辺和子と聖書を学ぶ」（107045）。

『山陽新聞』 2024 年 6 月 25 日

来年2月の吉備路マラソン

盛り上げへ学生委発足

応援、記念品アイデア反映

来年2月23日に総社市を発着点に開かれる「2025そうじゃ吉備路マラソン」(岡山県、市、市教委、山陽新聞社でつくる実行委、岡山陸上競技協会主催)の運営に主体的に関わる学生委員会が16日発足した。沿道の応援や記念品について若者のアイデアを反映させ、大会盛り上げに一役買う。



大会記念品タオルのデザイン案などについて意見を交わす学生委員

県立大、環太平洋大、ノートルダム清心女子大、川崎医療福祉大の1〜3年生計11人。市役所で第1回会合があり、大会長の片岡聡一

市長が一人一人に委嘱
委員長に選出された
た。実行委の下部組織
状態を手渡した後、参加
記念品のタオルやポス
ターのデザインなどを
熱意を取り入れ、ラン
ナーも市民も楽しめる
大会にしたい」と話し
わした。

として位置付け今後、
月1回程度会合を開く
予定。
今年2月の大会に県
内8大学の277人が
ボランティアで参加す
る中、「企画段階から
大会に加わりたい」と
の声を受け、委員会の
設立が決まった。

(寺尾彰啓)

『山陽新聞』2024年8月17日

「若者が変革起こして」

マルワラ国連大学長

岡山大でSDGs講演

SDGsをテーマに講演するマルワラ学長



者こそ声を上げて政策決定に関与し、変革を起こして」と呼びかけた。

学生ら約120人が聴講した。国連大学は地球規模の課題解決に取り組み修士・博士課程の人材を輩出し、来年創立50周年を迎えることから全国の大学などでも講演会を開いている。

岡山市を中心とした地域は05年、国連大学から「持続可能な

(山内悠記子)

国連大学(東京)のチリツィ・マルワラ学長(53)が28、29日に来岡し、岡山大(岡山市北区津島中)では国連が提唱するSDGs

(持続可能な開発目標)の目標のSDGs達成をテーマに講演した。2030年までの目標達成が困難な状況と指摘し、若者が政策決定に参画する重要性を訴えた。

国連事務次長も務めるマルワラ学長は「加世代に関する宣言」が速度的に進む気候変動や紛争を背景に17

え「社会の光である若

『山陽新聞』2024年10月30日

ノートルダム清心女子大
人文地理学研究室

4面に続く

地域課題の可視化 ノートルダム清心女子大人文地理学研究室

市消防局のデータの分析では、軽微な事故の52・3%を65歳以上の高齢者が占め、死亡率は成人の4・5倍に上ることが判明。時間帯は午後6時台、移動手段は歩行者とみられるケースが最も多いことも分かり、こうした傾向などを参考に市内の公

地図を「一松開した」として地産企業の「目」を留め、事故防止に努めた共同企業も実現。研究費が事前支給されたシネマランコは、改めてこのアイデアを練上げたのが経緯で、主筆の都立大学の岡山と広島市役所が協力し、たまたまがたがた、事故あちこち現場に近いところからたまたま発見に至るアリの巣根拠調査と実証実験が果たされた。

「物理的・用水路に於いてないようにする」を考へながら、掘削機を使用する「ロキチが『ロカウツ』だった」と経営者小野孝さん34、アリ関係に見舞われ、事故現場の巡回をついで文芸部部長の「さきやうな人にならねえよ」とは

岡山県内の用水路ゆきの周辺を走る有田線 (6300) 上学生—10月22日

人文地理学研究室が公開しているデジタル地図。
の用水路転落事故の場所や時間などが表示できる

解決手法 高校生にも指導

[illegible]

「足運び見る、聞く」を重視

[illegible][illegible]

「未来へ 知を拓く」はさんデジ
=スマホはQRコードから=でもこ
覧いただけます。

『山陽』

市の魅力発信へマルシェ 風車の写真スポット人気

瀬戸内

清心女子大の団体企画



風車を飾ったフォトスポット。海をバックに家族連れらが撮影を楽しんだ

トを設営。家族連れらで盛り上がった。

牛窓産バナナを使った焼き菓子、ことうじを使った弁当、浜辺で拾ったガラス片・シーグラスや備前焼のアクセサリーなどを販売する8店舗がずらり。来場者が目当ての品を買い求めた。フォトスポットは風車300個以上を使って海をバックに設置され、風車を作るワークショップとともに人気を集めた。

ノートルダム清心女子大（岡山市）の学生を同市牛窓町牛窓の県団体・nopak（の営機橋で開いた。グルぱっく）が16日、瀬戸メの出店や、風車を飾り付けたフォトスポット

同じゼミ生12人で構成。マルシェは地域課題の解決を考えるゼミ活動の一環で7月から

準備し、学生らの公益活動を支援する市の補助制度を活用して開催した。代表の3年京江知美さん（22）は「想像以上の人が来てくれた。店や行政の人と対話を重ねて新しいことにチャレンジでき、良い経験になった」と話していた。（大橋孝平）

『山陽新聞』2024年11月20日

「そうじゃ吉備路マラソン」(2025年2月23日・総社市)の参加賞としてランナーに配られるオリジナルタオルが完成し、20日に披露された。デザイ

総社

ンは、大会運営に若い目線を生かそうと今夏発足した学生委員会が担当。総社らしさを随所に取り入れポップな仕上がりになっている。(小畑誠)

五重塔や赤米デザイン



フルとハーフの出場者に贈られるバスタオルを手にする岡さん

吉備路マラソン 参加賞タオル完成

寒い時期でも温かみを感じられるようベースカラーはピンクを選択。太文字の「SOJA」「2025」を青や白で装飾

している。備中国分寺五重塔のシルエット、市のスタオル(幅34センチ、長さ120センチ)とフェー

85センチの2種類あり、バスタオルはフルとハーフ、フェースタオルは3、5、10メートルの出場者にそれぞれ贈られる。県立大など4大学で

つくる学生委11人が8月から会合を重ね、アイデアを出し合った。中心となったノートルダム清心女子大2年岡彩衣さん(21)は市在住

「は」幅広世代に喜んでもらえる一枚になったと思う。ゴールした後、ぜひ一緒に写真を撮ってほしい」と話した。

学生委は引き続き、Tシャツや大会ボランティア用帽子のデザインも手がけるという。大会は県、市、市教委、山陽新聞社でつくる実行委と岡山陸上競技協会の主催。

学生委は引き続き、Tシャツや大会ボランティア用帽子のデザインも手がけるという。大会は県、市、市教委、山陽新聞社でつくる実行委と岡山陸上競技協会の主催。

学生委は引き続き、Tシャツや大会ボランティア用帽子のデザインも手がけるという。大会は県、市、市教委、山陽新聞社でつくる実行委と岡山陸上競技協会の主催。

学生委は引き続き、Tシャツや大会ボランティア用帽子のデザインも手がけるという。大会は県、市、市教委、山陽新聞社でつくる実行委と岡山陸上競技協会の主催。

学生委11人 アイデア反映 ポップな仕上がり

無料託児サービス初導入 —— 実行委

「そうじゃ吉備路マラソン」実行委員会は、2025年大会から出場ランナー向けの無料託児サービスを初導入する。子育て世代の参加を促す狙い。

預け先は「そうじゃ子育ての駅ほのぼの」(総社市駅前)と「ほっとはあと」(同市岡谷)の2カ所。ほのぼのはボールプールなどの遊具、おもちゃが充実し、



子どもの預け先の一つ「ほのぼの」

ほっとはあとには砂場付き屋外広場を完備している。保護者が出場するレース

の種別は問わず、1歳以上の未就学児を午前7時半～午後4時半に預かる。定員は先着各10人。飲食物は利用者が用意する。

希望者は25年1月5日までにチラシ掲載のQRコード、メールなどでマラソン実行委(0866-828367)に申し込む。実行委は「安心してお子さんを預けてもらい、大会を存分に楽しんでほしい」としている。

(小畑誠)

『山陽新聞』2024年11月22日

認知症になっても頑張れる

認知症を正しく理解してもらおうと活動する岡山県内の当事者や家族、支援者らのグループ「はるそら」と、県立大（総社市窪木）の学生ら計約20人が、そらいろのTシャツを着て800名のユニ

当事者団体と 県立大生参加



笑顔でスタートする「そらいろ♡ほうじや」のメンバー

バーサルランに参加した。「はるそら」と県立大は2023年11月から毎月1度、キャンパスで交流会「そらいろ♡ほうじや」を開催しており、その中で出場を決めた。Tシャツは学生がデザインし、手を取り合っ

た。大会の魅力アップにインなどを考案した。取り組んできた岡山県この日は各自が希望する分野のボランティア「学生委員会」のメンバーに当たった。市中央 付近のスタート地点で選手の誘導係を務めたのはノートルダム清心女子大1年中期的に集まり、若者視野結さん(19)。「自分点で記念グッズのデザ

学生委裏方で奮闘 誘導係やごみ分別



ごみの分別に当たる学生委員会の森さん(右端)ら

したが、選手の助けい経験になった。将来になれてうれしい」との仕事を生かしたい」笑顔で浮かべた。福祉と話した。事業所の利用者ごみ他のメンバーは給水の分別を行った川崎医師の運営や給水の提供、開会式やスタートさん(21)は「利用者と場面のライブ配信などを一緒に作業ができてい担当した。(小畑誠)

笑顔、交流の輪広がる



表彰式後、ファンとの記念撮影に応じる塩出選手(右から3人目)
(後藤泉希)

『山陽新聞』2025年2月24日

日本では、他の先進諸国と比べて、4年制大学への進学率がまだまだ低い状況です。進学率の向上は社会全体にはプラスですが、個人にとって大学に進学する意義とは何でしょうか。

日本の大学の学費は安いものではありません。ただ、卒業で得られる学士号は、やはり職に就く上で、他と比べようがないほど強力な称号です。

そしてその価値は上昇しています。日本の大学の授業は、昔はかなり適当で、授業外の課題もなく、成績評価もひどいものでした。それゆえ企業も就活の際に学生の成績をほぼ考慮しませんでした。

しかし、ここ20年で日本の大学は大きく変わりました。文科省の方針で、欧米（特にアメリカ）の大学のように、

大学に進学する意義

授業は明確に組織化され、成績評価が厳密になり、全授業で宿題（自学習課題）がたっぷり出されるようになりました。一つの授業（1時間半）につき、毎回、3時間分の課題が出されますので、週に4日、1日四つの授業があれば合計48時間分、毎日、約7時間の課題です。チームで取り組む課題も少なくありません。

4年の間に、学生がコミュニケーション力や専門的な知識・技能（調査力や文章・プレゼンテーション力含め）を大幅に伸ばすのも、至極当然のことなのです。

そしてその学びの実績を、企業も就

一日一題

ノートルダム清心女子大
文学部現代社会学科教授

濱西 栄司

活の際に評価するようになりました（世界的には当たり前のことです）。大学でしっかりと学べば、良い職に就くことができ、それによって学費分もカバーできるようになりました。それゆえ昔と比べて、大学に進学する意義は、個人にとってもかなり明確になっているのです。

2024・4・4

『山陽新聞』2024年4月4日

前回（4日付）は、日本における大学進学率の低さと、大学に進学する意義についてお話ししました。

実は、日本で特に進学率が低いのは「女性」です。他の先進諸国では、女性の方が高いくらいですが、日本ではずっと低いままなのです。

前回お伝えしたように、大学と企業の変化によって大学進学への価値は高まっていますし、女性差別の根深い日本社会において女性が大学に進学することは、かなり合理的だと言えます。

ただ、日本の一般的な大学が「女性」にとって、男性と同程度に安全な学びの場になっているかというと、残念ながらそうとは言えません。

まず進学率の差によって、当然、男

女性と大学進学

子学生の方が多く、基本的に女性は少数派です。大学教員の女性比率も全大平均でわずか26・7%でしかありません（国立大は2割にも達しません。2022年度調査）。管理職は男性中心ですし、経営陣もほぼ男性ばかり。学内でのセクハラ事件も多いです。

大学は大きく力を伸ばせる場になりましたが、「女性」にとっては、まだ安心して学べる場にはなっていないのです。

女子大学の存在意義の一つがここにあります。女子大では、学生は「女性」ばかりで、教員のジェンダー平等も実

一日一題

ノートルダム清心女子大
文学部現代社会学科教授

濱西 栄司

現されています（本学では教員の51%が女性で、管理職や経営陣の半分も女性です）。皆が女子学生の学びを支援してくれま

「女子大では男性と連携・協力する機会がない」というイメージは昔のもの。アメリカのトップレベルの女子大学がそうであるように、現代日本の女子大学では、大学の外に出て企業や行政と連携する事業が非常に盛んで、学生はさまざまな年代の男性と協力して活動しています。企業や行政、団体へのインターンシップ参加もとても盛んです。

学内で安心して学びつつ、外へどんどん出ていく。それが現代の女子大学なのです。

2024・4・11

『山陽新聞』2024年4月11日

前回(11日付)は〈外へどんどん出ていく現在の女子大〉についてお話ししました。

現代の大学は、研究、教育に加えて社会貢献(地域貢献・産官学連携)に熱心に取り組んでいます。

大学進学率が1割に満たなかった時代、大学は研究を軸とするエリート教育の場として位置付けられていました。やがて産業が高度化し、社会で専門知識が重視されるようになると、大学の数が増加し、進学率も高まってきました。そして18歳人口の半分ほどが大学に進学するようになると、洋の東西を問わず、大学は多数の多様な学生をしつかりと教育する場としての性格を強めていきます。

大学と企業連携

そしてさらに産業高度化が進み、大学進学率が高まり、他方で企業の研究開発費の抑制や地方での産業の衰退、少子高齢化が進むようになると、大学には(地域)社会・産業への直接的な貢献も求められるようになりました。専門的知識を有し、若者も集める大

学との連携を企業は求め、大学側も(アメリカの大学のように)長期インターンや商品企画事業などに学生が参加できるような企業連携を深めるようになっていきます。

本学でも、私が長を務める産学連携センターが中心となって、企業との連

一日一題

ノートルダム清心女子大 演西 栄司
文学部現代社会学科教授

携を強化しています。女性顧客の多い企業や、女性消費者向けの商品・サービスを増やしたい企業からすれば、女子大は、かなり魅力的な連携先です。ジェンダーバランスの観点から、優秀な女性社員、幹部候補の女性を求める企業も、女子大との連携に非常に熱心です。

学生の企業連携への関心も年々高まっていますし、最近では起業に関心を持つ学生も増えていきます。私も今年から新たにソーシャルビジネスの授業を開始しましたが、かなり人気です。女子学生の日々の悩みや不安を解決するような商品・サービスを、企業と連携しながら作り出していきたいと考えています。

2024・4・18

『山陽新聞』2024年4月18日

4月は大学の変化についてお話ししました。5月は、本学独自の全学的な社会連携活動(清心コラボ)について紹介したいと思います。

通常、いずれの大学でも、社会連携活動は、基本的にゼミや授業を単位としてなされています。その場合、学生の管理は容易ですが、各教員の方針や熱意に大きく左右されてしまいます。専門や学年の異なる学生が一緒に活動することもあまりありません。

そこで本学では、地域連携・SDGs推進センターが中心になって、学科・学年にかかわらず希望者全員が参加できる全学的な社会連携活動を昨年から開始しました。

全学的な取り組みの場合、通常は、

清心コラボ① JAF

学生間で熱意や知識がバラバラで、途中離脱する学生も多数出てきます。それに対して本学では、1年生全員がキリスト教の精神や生き方、SDGs(持続可能な開発目標)などについて深く学び、リベラルアーツ大学らしく学生数も意図的に抑えています。学生も非常に熱心ですし、他学科の先輩・後輩と一緒に活動することを本当に楽しんでくれています。地域社会での本学学生に対する評価も高く、ありがたいことに多くの企業・行政・団体が連携を希望してくださいます。

こうして清心コラボは順調にスタート

一日一題

ノートルダム清心女子大 演西 栄司
文学部現代社会学科教授

トし、全国的にも先駆的な取り組みとして注目を集めています。

例えば昨年3月から始まったのがJAF(日本自動車連盟)岡山支部との連携活動です。5学科の1・4年生9人が集まり、自転車ヘルメット着用率アップのために、安全とオシャレを両立するヘアカタログの作成と効果測定活動を、岡山NPOセンター、美容院Kot-i、そして清心中学校・清心女子高等学校の協力も得ながら進めてきました。

自転車ヘルメット着用率の低さは全国的な課題になっていますので、この活動はメディアでも大きく報道されています。ぜひ注目してください。

2024・5・2

『山陽新聞』2024年5月2日

前回(2日付)は本学独自の全学的な社会連携活動(清心コラボ)の概要を紹介しました。

年間で延べ200人以上の学生がさまざまな活動に参加していますが、アンケートによればその99%が「自分の成長・学びにつながった」と評価し、9割以上が「友達にも勧めたい」「将来のキャリアを考えることにつながる」と実感しています。

特に清心コラボが目指す「学科学年を超えた取り組みであること」を9割が評価し、ゼミ・授業と無関係である点も高く評価してくれています。ある学生は「自分でやりたい人だけが参加するため、思い・熱意がある人たちがかりで、真剣な意見が聞けた」

清心コラボ② 湯郷ベル

り、夢について語れたりする点が良かった」と答えてくれました。

中でも一番幅広く学生が参加している活動の一つが女子サッカーチーム岡山湯郷Belle(ベル)との連携事業です。湯郷での試合観戦や謝恩会への参加から連携を開始し、昨年5月のシティライ

一日一題

トスタジアムでのホーム戦には学生が観戦や運営ボランティア、屋台出店等で協力しました。ベル側も清心学生向けに特別なストレッチのプログラムを実施してくれました。

その他、大学祭に選手を呼ぶ企画やサッカー教室の企画、また公共交通機関と

5月は、本学の全学的な社会連携活動について紹介していますが、今回は国連大学との連携についてお話をしたいと思います。

国連大学は、2020年10月に、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に資する先駆的な取り組みを行う27の大学を連携し、「国連大学SDG大学連携プラットフォーム」を設立しました。東京大や大阪大、北大、上智大、慶応大、関西学院大などと並んで、本学は唯一の女子大として選ばれました。

評価されたのは、①本学の設立母体ナミール・ノートルダム修道女会が長年、開発途上国支援に取り組み、国連NGOとしてSDGs策定にも関与

清心コラボ③ 国連大学

してきたこと。また②本学では長年、教員の半分が女性であり、管理職・経営陣の半分も女性で組織としてジェンダー平等を達成していること。そして③駅などでの風俗業への暴力的なスカウトを禁止する岡山県迷惑行為防止条例改正に取り組んだことなどでした。SDGsは本

一日一題

来、社会を大きく変えるためのものです。で、条例というルールを変える取り組みは、とても重要なものとして評価されます。

同プラットフォームでは毎月のようにセッションを行い、海外の先進的な大学ともやりとりをしてきました。また分科

の3者連携なども検討してきています。

今年も6月15日(土)に大学近くのシティライトスタジアムでホーム戦が実施されます。早速、学生に運営ボランティアの募集をかけたところ、既に8学科の114年生100人以上が手を挙げてくれています。

昨年は、あと一歩で昇格は逃しましたが、今年は開幕から6連勝で首位。平均得点も4点と攻撃力にさらに磨きがかかっています。

3日も首位決戦に勝利し、6日も逆転勝ちで首位をキープしました。得点ランキングも横山久美選手が独走しています。皆さんぜひスタジアムへ。

2024.5.9

『山陽新聞』2024年5月9日

ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科教授

濱西 栄司

会で具体的な活動も進めてきています。「SDGsカリキュラム分科会」(幹事はノートルダム清心女子大学・国際基督教大学、関西学院大)では「国連SDGs入門」という授業を、12大学・国連大学と連携して構築・実践してきました。

本学では私が担当していますが、毎年、熱心な学生(全学科の114年生約100人)が受講してくれていて、受講生はさまざまな全学的な社会連携活動(清心コラボ)の中心にもなっています。

他大学の方も、社会人の方も、科目等履修生などとして履修できますので、もしよろしければ。

2024.5.16

『山陽新聞』2024年5月16日

2. 2024 年度 生涯学習センター「清心 felice」講座の記録

	開催日	講演・講座名	講 師
公開講座			
SDGs 講座	12 月 7 日 (土)	誰一人取り残されない社会を目指して—孤独・孤立について考える— —[基調講演] 大西連 / [実践報告] 矢内悟、木村理枝子 / [パネルディスカッション] ファシリテーター: 石原達也 パネリスト: 大西連、矢内悟、木村理枝子、人間生活学科福祉ゼミ学生、参加者	
防災／ SDGs 講座	7 月 20 日 (土)	相互扶助とボランティア—ともに乗り越えて見えるもの—	難波 妙
	8 月 3 日 (土)	災害ケースマネジメントの取組と官民連携の必要性—あなたの『できる』が誰かの『チカラ』になる—	椿原 恵
インクルーシブ講座	10 月 26 日 (土)	インクルーシブな授業の探究—通常学級におけるUDL—	山田 洋一
	11 月 9 日 (土)	ケアの包摂性を考える—つながりを生きるかたち—	崎川 修
	12 月 21 日 (土)	マイノリティとマジョリティの関係から考えるインクルーシブ教育	武田 緑
生涯学習講座			
いきがいの 人間学	7 月 13 日 (土)	生を見つめる哲学—キルケゴールとニーチェ—	崎川 修
	7 月 27 日 (土)	苦悩から希望へ—フランクフルとレヴィナス—	
聖書講座	10 月 3 日 (木)	遠藤周作と聖書を学ぶ	山根道公
	11 月 7 日 (木)	井上洋治と聖書を学ぶ	
	12 月 5 日 (木)	渡辺和子と聖書を学ぶ	

3. 2024 年度 産学連携センター事業の記録（一部）

契約関係	企業等との共同研究契約締結 5 件 企業等との受託研究契約締結 1 件 その他継続契約 4 件
相談等	企業等からの共同研究等相談受付 4 件 その他相談受付 15 件
知的財産	特許移管、出願等について検討・実施 3 件
企業・産業界と連携 しての教育・学生連 携関連の活動	・ 岡山県立大学 OPU フォーラム出展 5 月 24 日 食品栄養学科 吉金優准教授
	・ おかやまデジタルイノベーション創出会議（OI-START）加入 7 月 25 日
	・ 企業と大学の共同研究センター主催ミニシーズ発信会 8 月 26 日 食品栄養学科 吉金優准教授発表 2025 年度に向けて 2 学科 2 名 検討・調整中
	・ 第 29 回岡山リサーチパーク研究・展示発表会 12 月 17 日 ポスター発表 情報デザイン学科 前川准教授 ポスター展示 食品栄養学科 小林謙一教授、吉金優准教授 情報デザイン学科 吉川隆士教授、鈴木優准教授、前川浩基准教授
	・ 「オープンイノベーション Match Up」開催 1 月 24 日 於本学 主催：本学及びおかやまデジタルイノベーション創出会議 ▶ オープニングトーク 中本幸一情報デザイン学部 学部長 ▶ シーズ発信 情報デザイン学科 河野英太郎教授、鈴木優准教授 ▶ ポスター展示 食品栄養学科 小林謙一教授、吉金優准教授 国際文化学科 岩瀬真央美教授 情報デザイン学科 河野英太郎教授、吉川隆士教授、鈴木優准教授、 前川浩基准教授 ▶ アイデアソン 本学教員及び学生 5 名参加
	・ 大学ウェブサイト 社会連携・研究ページリニューアル
	・ 『TSUNAGU（教員紹介集）』をリニューアル検討 2025 年度に作成予定
各種セミナー参加	・ 文部科学省 研究インテグリティ説明会（オンライン）4 月 23 日 ・ 令和 6 年度大学等輸出管理担当者向け講習会（岡山会場） 11 月 25 日、26 日 ・ 大学における安全保障貿易管理（オンライン） 12 月 26 日
調査・研究	・ 社会連携・研究推進体制について調査

地域連携・SDGs推進センター実績報告書 [2024(令和6)年度]

2025年7月発行

編集・発行 ノートルダム清心女子大学 地域連携・SDGs推進センター
〒700-8516 岡山県岡山市北区伊福町二丁目16番9号
TEL 086-252-7054
FAX 086-252-7044

印刷 有限会社 ダイニ印刷
〒700-0961 岡山県岡山市北区北長瀬本町13番26号
